
ロキンローライフ

桶乃弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロケンローライフ

【ZINE】

N1665W

【作者名】

桶乃弥

【あらすじ】

この物語はある無名のギター少年が、バンドの解散、挫折、業界の闇、時に色恋にロックし、時に裏切られ、時に友情を育み、紆余曲折の音楽生活の中で、夢の舞台である武道館でのライブを目指し突き進む、ロケンローな物語である。

-1- 解散じゃボケエ！

それは、俺がまだギター少年だった二十歳の頃に遡る。高校の時に組んだ俺たちのバンドが、結成わずか一年とちよつとで消滅したあの日に……。

寂れた片田舎のライブハウスから客が一人、また一人と店をあとにする。それは何年振りだろうか、白い雪がチラつくホワイトクリスマスだった。こんなちょっとしたロマンチックなクリスマスイヴの夜だというのに、似つかわしくない大きな怒号がその楽屋から響き渡ったんだ。

「ふざけんな！ ボケエ！」

その大声の主は、俺たちのバンド『ローリング・クレイドル』のボーカルを演っていたケイン。顔立ちはその名の通りハーフでイケメン。ただ、興奮するとガキの頃暮らしていた名残から、ド関西弁がぶつ飛びツワモノだ。

「なんじゃ、お前ら！ どいつもこいつもムチャクチャなステージ演りやがって！」

ケインが顔を真っ赤にして怒鳴りあげる。どうやらかなりご立腹のようだ。もつとも、顔が真っ赤なのはステージ後に楽屋でヤケ飲みしたビールの影響も多少あるようだが、今日のヤツの怒りっぷりは、いつもとはちょっと違っていた。

「デル！ なんじゃあのギターはつ！ 勝手にダラダラとソロなん

か演りやがつて！」

丞先がギターを担当している俺、通称『デル』に向けられた。俺がステージで気持ちよくなれば、大体、毎回、ソロが長くなるのは今に始まつたことじやない。でも、どうやら今日のケインには、それが政治家の国会答弁のようにウザかったようだ。

「チツ、つるせーな。もうそれくらいでいいだろ！」

ケインに楯突いたのはドラム担当の通称『マツチヨ』。マツチヨと言つても別に体格がゴツイわけではなく、プロレスラーの藤波辰巳をリスペクトしているかららしい。何故『ドラゴン』をチヨイスしなかつたのか、その理由は誰も知らない。

「なんじや！ オラ！ 文句あんねやつたら言つてみんかい！」

火に油だつた。ぶつちやけると俺からみても、この口マツチヨがケインに物申せられる立場では無かつたのだ。実はドramaーの命であるドラムスティックを、ここに来るまでの電車の中に忘れてきたという大失態を冒してからだつた。幸い、ライヴハウスの備品を借りて事なきを得たが……。ケインがマツチヨに食つて掛かる。

「電車にステイック棄てるような奴に音楽のナニを聞えるんじやい！ オラ！ なんか言つてみい！ オンドレメンドレ！」

ケインの関西弁がますます酷くなつていぐ。こうなると本場の関西人でさえ、『そんな関西弁使つか！』と、許容範囲を超えるガラの悪さに到達するのも時間の問題だ。ケインによれば『中途半端に関西で暮らした人間に表れる特有のクセ』らしいが……。はて、本当だらうか。

「クソッ、あー、胸糞悪いっちゅーねん！」

ケインは悪態をつくだけついていきなり楽屋を飛び出して行った。一度爆発したケインを止められるヤツはメンバーに居ない。俺たちはケインの居ない楽屋に少しホツとした。

普段は真面目で温厚なケインが、こんなにも感情をむき出しにするにはそれなりに理由もある。今日ヤツは最近付き合い出した彼女とデートの約束をしていたらしい。だが、なかなか借りる事の出来ないイヴのステージを、キヤンセル待ちで運よく確保出来たこともあって、ケインは泣く泣くこのクリスマスイヴのデートを取りやめた。

だが、そんな思いをしてまで挑んだライヴにも関わらず、自分で言つのも難だが、俺たちのステージは酷かった。バンドっていうモノは、メンバー同士のちょっとした意志の擦れ違いで、音が百八十度変わることもある。演じている俺がその不協和音に気づく訳だから、当然客はもっと敏感に察知するだろう。そして、ケインもそれに気づいていた。

ステイックを忘れたドラム。バイトがあるからとドタキヤンしたベース。サポートメンバーの代役でやって来た、演奏歴たった一週間の素人キーボード。そして、自己中全開でギターをかき鳴らした俺。ケインはそんな演奏に嫌気がさしたのか、歌詞なんてそっちのけで序盤から執拗にシャウトを繰り返す。

結局、怒ったケインがセットリストの中盤でさつさと楽屋に引き上げてしまい、持ち時間を大きく持て余したまま楽器メンバーだけ取り残されたステージ。仕方なくそれっぽいジャムを十分間程度披

露してステージを無理やり終わらせた。まあ、俺から見ても本当に酷いステージだった。よく客が『金返せ』と言わなかつたもんだ。

……いや、まあ俺たち素人バンドのライブなんて聴いている客は殆ど居なかつたつてのがオチだけど。そういうや今日だつて来ている客と言えば、例えるなら閑古鳥鳴いてる川崎球場のスタンドで、試合をつちのけでちちくりあつていてるカツプルみたいな客が数組だつたつけ。

と、楽屋のドアが「ドン」という衝撃音と共に勢いよく開く。

「なんやねん！ クソッ！」

ケインが携帯電話片手にブルブル震え楽屋に舞い戻ってきた。どうやら自分なりに頭を冷やして冷静になつと外の空気を吸いに出たものの、外は何とも口マンチックなホワイトクリスマスだつたという事実に気づき、おまけに極寒の中電話をかけても彼女と連絡がつかなかつたらしく、さらに「機嫌が斜めになつたようだ。

「もうええ、あーもうやつてられるかー こんなバンド今日でもう解散じゃボケヨー！」

唐突に飛び出した解散宣言。いや、本当は誰かがそのうち口に出すんだろうと感じていたその言葉だつた。ただ、それがケインから発せられるとは思わなかつた。アイツはこのバンドに結構魂を注ぎ込んでいた。

「やつお前じとせ金わんからなー 絶交じやー クソがつー！」

とにかく文章にするのも滅入るほど罵詈雑言を発してケインは

樂屋から姿を消した。

「それじゃあ……、僕これで失礼します」

サポートメンバーの代役だった……。あれ、名前なんだつたつけ? とにかくキーボードがノソノソと引き上げていく。サポートのサポートってどんだけ層が厚いんだウチのバンドは。いや、層が厚いんじゃない。肝心の層が薄いんだ。ミルフィーユなら約三層程度。フォークを入れればすぐに皿に当たる。

「さて、俺も帰るわ

ドラムのマッチョもバツが悪そうな顔をして立ち上ると、俺も同じようにギターケースを手に立ち上がった。店の外に出るまで一人とも何も話そうとはしなかった。ケインのことも、今後のことも。

「じゃあ、またメールするわ

「ああ、お疲れ」

俺たちは店の前で別れた。この時、バンド『ローリング・クレイドル』は解散した。俺たちのオリジナルで、毎回ライブでは必ず最後に演奏した『ダッシュ』。それを最後のこの日に披露することも無く。

この日の為に新調した黒のジャケットが、雪に埋もれて白く染まつしていく。人もまばらな駅前では、この寒空の中居酒屋の店員が呼び込みしている。

「こんばんは! 今日はクリスマスなんでビール一杯百円です!

「……………」

「……………。マ、マジッすか？」

「ハイッ！　マジッすよー！」

「こんな夜は独り酒もいいかな。店員の兄ちゃんの威勢に押され
て、俺は煌々と照らされた赤ちゃんの世界へと吸い込まれて
いったのだった。

- 2 - 表現者とは

その日は、悪いことつづいて続くもんだなと思いついた。バン
ド解散の翌日、俺は一晩酔いの頭をフラフリさせながら、バイト先
の音楽スタジオで受付の仕事をしていた。

「おはようございます」

「あ、おはようございます。今日は早いですね」

「うん。ああそうだ、悪いけどシールド貸して欲しいんだけど」

「はい、ちよつと待つて下さいね……」

スタジオには色々なジャンルのミュージシャンの卵が訪れては、
皆が思い思いに自分の演奏に磨きをかけたり、音楽を嗜んだりして
いる。この四十年代の男性も昔からウチの店を巣窟にしてくれている
ちよつと紳士な感じのキーボード奏者だ。平日だが年の瀬の冬休み
とあって、いつもは土日しかやってこない学生や会社員の会員もチ
ラホラ。その殆どの客は顔なじみだつた。

「お待たせしました。どう」

「ありがとうございます。今日何時間の予約だつたつけ？」

「うーんと、一時間……スネ」

「了解、ひょつとしたら延長するかも。大丈夫？」

「あー、今日は立て込んでて無理っすねえ」

「ナハハ、じゃあ仕方ないか」

「すいませこ」

「こやこや、せこせこあおきつするな」

「はーー。ビリギー」

この町に数少ないスタジオは、俺にとつても絶好の練習の場だった。高校の頃にバンドを結成して以来、ちょくちょく借りていたこのスタジオで、たまたま見かけたバイト募集の張り紙。俺は高校卒業と同時に進学せず、ここで毎日アルバイトを続けていた。

「おはよひじがこます。Bスタ空いてますか？」

「やあ、おはよう。あれ？ 今日予約入れてたっけ」

「いえ、空いてたらラッシュキーかなって」

「うーん、埋まつちやつてるよ」

やつて来たのは女子高生の小川理恵。おがわりえガールズバンド『スイート・ツイート』のギター兼ヴォーカル。土日は決まってウチで練習していく彼女たちだけど、こここの所毎日のように彼女だけ店に訪ねていた。

「やつですかー。じゃ、またそこで雑誌読ませて貰つてて良いですか？」

「うふ、いいけど。今日は多分キャンセル出ないかもよ」

「いいんです。Uのロビーの雰囲気とか結構落ち着くんで」

「あ、そう。ま、別にこっちの事は気にしないでいいから」ゆづく
り。空いたらまた声かけるよ」

「はいー。」

スタジオと言つても片田舎の小さな店。雑然としたロビーの傍ら
に設けた待合用の椅子にその娘はちよこんと座ると、袖のマガジン
スタンドから雑誌を手に取りパラパラとページをめくる。ココんと
ころころして暫く雑誌を読んだり、俺のバンドについて聞いてきた
りして、小一時間すると帰つていく。ショートボブの髪型が良く似
合つ女の子だった。

別に詮索するつもりはないけど、練習が出来ないなら友達と遊び
に行つたり、ショッピングしたりとか、女子高生なら幾らでも時間
を過ごす方法があるはずなのに、こんなむさ苦しい小さなスタジオ
のロビーで、缶ジューク飲みながら折れ曲がつてボロ付いた雑誌を
読んで……。まして客の入れ替わる時間以外は殆ど俺と一人つきり
……。

「あれ？ ひょっとして、これって恋愛フラグ立つた？」

なーんて、ちょっとはそう思つても不思議じゃないくらい、練習
は他のバンドメンバーとやつて来た時くらいだつた。まあ、理恵ちゃんも一応ギターは持つてきているけど……。俺に会うためのカム
フラージュ？

「あ、何ですかこれ？」

理恵ちゃんが店の壁に張っていた『出てこいや音楽祭』のポスターを指さし尋ねてきた。

「え？ ああ、来年の夏に野外イベントがあつて、その新人オーディションの告知」

「へえー」

「応募してみたら？」

「そんな全然！ ウチらのバンドなんてまだまだですよお」

「んなの気にするなつて。表現者つてさ、人に聴いて貰つて、観て貰つて、初めて成り立つもんだぜ。音楽だらうと、作家だらうと、スポーツだつて関係ないよ。他人と比べたり、自分の音を卑下したり、逃げ出したりする前に、出来ることをガンガンぶつけてやんなきやー！」

「……。そうですよね」

「そうだつてー！」

「何か自信が湧いてきましたー！」

「そりそり、未来なんて余計な事考えずに、いつちやえ、やつちやえー！」

「あはは」

めっちゃ瞳をキラキラさせて俺を見る理恵ちゃん。ヤバイ、惚れた。可愛い。決まった。彼女居ない歴二年。そろそろ恋愛にも目を向けないとな。ここで一気にデートの約束だ。

「じゃあ、テルさんのバンドも一緒に応募しましょいよ」

「え？」

一気に現実を突き付けられた。そうだった。俺の生活の一部であり、今は見えなくても、きっとその先に光り射している未来へと二年前に出航した船。希望と野心と情熱に満ち溢れ乗り込んだ俺たちのその船は、昨日あっけなく沈没したばかりだったんだ。気づけば俺は目標となる灯台を見失っていた。

俺は話を逸らすかのように、こそりとロビーのテーブルを片付けながら俺は理恵ちゃんに問い合わせた。

「それよつ、ギリギリ、バンドの調子」

「え？ あ、すりいぐく楽しげですよ。みんな仲良しだし」

「そりゃいいじやん」

「テルさんのバンドは？ そりゃ、昨日ライブだったんですよね！ 行きたかったなあ……。ギリギリでしたライヴ？」

そりゃ、そりなるよな。じいじで会話してりやその話から逸らすことは出来ない。俺は理恵ちゃんなり良こかと打ち明けることにした。

「えーっと……。はは……解散しちゃった」

「えつー」

解散と口にしたら彼女は驚き立ち上がり、同時にすんぐ悲しい顔をしてくれた。「なんで、じつして？」って少し涙目になりながら。

こんなちっぽけで誰も知らない存在だった俺たちのバンドでも、解散を悲しんでくれる人が居るんだって思い知った。尤も、その有難みをちゃんと理解できたのは、もつともつと後のことだったけどや。

「これからどうするんですか？」まさか、音楽辞めないですかね

「そりゃせんせー、ギターは続けるよ」

「……良かったあ

ホッとした表情で理恵ちゃんは椅子に腰かけてジュークを手に取ると一口喉を潤した。少しは落ち着いてくれたようだ。

「私、デルさんの曲好きなんです」

なんだ、『俺』じゃなくて俺の『曲』が好きなのか。じゃなくて……。嬉しいことに叫びてくれるぜ。やっぱこれは恋愛フラグ決まりだな。

「今の私にとづてデルさんが目標なんです」

「あ、ありがとうございます」

これは、アレだな。このまま告白タイム突入しちゃうのかな。そりやそりだよな、やっぱロッカーには女が必要だよな。なーんてバンド解散そっちのけでふわついていたその時、キキッといつ音と共に店のドアが開いた。

「おはよう」

「あ、おはようございます店長」

何とこうバツドタイム。この店のオーナーの小川功治さんおがわこうじが

現れた。しかもこの人は理恵ちゃんの父親ときたもんだ。

「なんだ、来てたのか」

「うふ

店長はあまり理恵ちゃんの音楽活動を歓迎してないみたいだった。理恵ちゃんもウザそうに雑誌を読み始めた。あーあ、告白タイムはこりや無いな。

「デル君、ちょっと良いかい?」

「はあ?」

俺は店長に店の外へ誘い出された。

店長の正体はもう三十年近く前。 そう、バンドブーム盛んな八十年代に一世を風靡した本格派ロックバンド、『櫻神樂』のギタリストだった。店長が作詞作曲した「鏡」は当時ヒットチャートを賑わしたが、その後は鳴かず飛ばず。地味に音楽活動を続けていくうちに、ひとつりとこの町でスタジオをオープンさせたんだ。

「デル君に話がある」

店を出るとタバコに火をつけた店長は、どこかバツ悪そうに俺にそれを告げた。

「実は今年いっぱいで店を閉めようと思つんだ」

「はい?」

「悪いが、君に店を手伝って貰つのは今日までのことでいい」と

「……はい？」

「すまない」

ビルの片隅に据え置かれた灰皿に、一、二度、三度とタバコの灰を落としながら、店長は俯きながら俺に謝った。まいつた。告白タイムつてこつちかよ……。俺は文字通り頭が真っ白になっちゃった。

田覚めの悪い朝だった。こんな日に限ってやけに朝日が田に染まるほどに輝いてやがる。だからカーテンは遮光性の高いものにしてくれつづったのに。

頭をバリバリと搔きながら、枕元の携帯電話を手に取った。なんだ。まだ八時じやねーか。いつもならチャリンゴぶつ飛ばしてバイクに向かっている時間だ。

そうだ、俺は今日から無職になつちました。ふと、昨日の店長の申し訳なさそうな顔と言葉が浮かんでくる。

「本当に悪い。もつと早く伝えるべきだつたんだが、色々とあって『やうつスか……』

とは答えて納得した振りをしてみたが、当然の『』とく納得なんてしちゃいなかつた。まさか無職で年を越すことになるなんて想像もしていなかつた現実。

バンド解散、バイトをクビ。一体この負の連鎖はなんなんだ。昨日の朝にテレビでやつていた星占いは一位だつた筈だ。大体あの手の占いなんてもんは、順位が低い方が当たるんだ。バカにしやがつて。と、ブツブツ文句を垂れながら、部屋のテレビでその星占いを観ていい俺がいる。

「 今日の蟹座のあなた！ もめでとび『』ぞーします！ 一日連続の一位です！ 突然の恋のチャンス。あなたの魅力が最大限に發揮

でれる | 田代か

なんだか、このモヤモヤとした不安な占い。——田連續で同じ星座が一位なんて今まで聞いた事がなこと。なるほど、俺の凹み具合を案じてわざわざトレビ局が調整してくれたんだな。

「……あほいし」

バカな考えで自分を慰めるのにも限界がある。再び布団を被つてふて寝を決め込もうと思ったら携帯電話が鳴りやがった。

「おはよう」

「悪いね、朝から」

「おはよう」

「いえ、大丈夫ですよ。いつもなにかうつスタジオに居る時間なんで」「ハハ、わうだつたね」

店長からだ。聞けば今月分の給料を早速払ってくれるらしい。ま、そういうことなら貰つておかなきやな。

身支度を済ませて家を出ようとする俺に、オカンが怪訝な顔で問いかけてきた。

「今日せやけにやつてくつじやない」

「え？ んあ……。こつてきまーす」

オカソにはまだ何にも話していない。大学進学もせず、音楽に打ち込みたいと半ば強引に押し切った一年前の高二の俺。バイト代からわずかでも一応家に金は入れてきたからか、何とか親からのプレッシャーをかわし踏みとどまっていた。

でも、その音楽も、仕事までも失つちまつた今、何を言えるのか。オカソはともかく、もう一年近くマトモに口も説いてないオヤジになんてなおさら……。

いつのうな顔でチャリン口を漕いでいるのが自分でもよく分かる。もうこんな清々しい朝にスタジオへ駆けつけることも無いのか。何だか感慨深い反面、突き付けられている現実を何とか振り飛ばしたい一心でもあった。

「おはよおはよおはよおはよ

「ああ、悪いねわざわざ」

スタジオのドアを開けると店長が忙しそうに片付けを始めていた。店長のやつれた顔から、昨日余韻の常連をさらにひたすら謝り続けた疲労感が伝わってくる。

「店長、別に俺は今ヒマですから、手伝ってくれこしますよ」

「あらがとう、でもな、これ以上君に迷惑はかけられんよ。こんな急な話になつたことは本当にすまないと想つてゐる」

「はあ

何か引っかかった。店長は何かを隠している。俺には何となく分かつたんだ。俺はその理由を尋ねてみたのだった。

「店長、こじり閉めてどうするんですか?」

「この質問は別段含みを持たせたものじゃない。普通に出てきた疑問だった。でも、店長にとつてはかなり核心を突かれた一言だつたらしい。どこか焦つたような表情が見て取れた。

「いや、まあ……」

やつぱり何かあるようだ。目が笑つてないワイドショーの芸能リポーターよろしく、興味本位でさらに突っ込んでその奥に潜んでいる裏話が聞きたくもなる。だが、たかがバイトの俺がそれを聞いた所で何にもならないのは、店長が言葉を濁した時点で察しあつく。

「あ、いや、話しつくいならイイです。ハイ」

「……実はな。東京で新しくスタジオを開くことになつたんだ」

「えつー、マジっすか」

東京。この田舎町から車で軽く数時間はかかる、憧れの大都会だ。俺の高校時代の連れも、『上京』という言葉の響きだけに誘われて、わざわざ東京の大学を選んだ奴も少なくはない。

そん時は鼻で笑つっていた俺だつた。お前ら単に『東京人』になりたいだけじゃねーのか? そこにポリシーはあるのかよつてさ。でも、今にして思えばそれはミユージシャンにだつて言えることだつた。東京に行けば活動できる場所も、売り込みのチャンスもこんな

田舎町とは比較にならないはずだ。

こいつからか俺も東京という言葉の魔力に、ついつい惹きこまれそうになっていたことは否めなかつた。そんな折に店長から飛び出した東京進出の「コース。俺は「何だよアンタだけ」という嫉妬心と同時に、素直に「羨ましい」という感情が交錯していた。

すると店長は意を決したように俺に向かつて話し始めた。

「デル君、もし君さえ良ければ……。私の……東京の新しい店を手伝ってくれないか

「ええっー。」

俺は思わず身をのけ反らせて、かなり大胆なリアクションで驚いた。だが、やはり俺つて男は嘘をつけない性格だ。次の瞬間には二タ一タと田の奥で笑みを浮かべながら「いやっ、そんな、俺なんて、そんなっ」と、とりあえず謙遜してみせた。

「いや、やうだな。まったく、どじまで私は勝手な奴なんだっ！」

はあ？ ノーッ！ そんなことは無いんだっ！ アンタ最高に影响力した事を俺に告つてくれたんだ！ 俺はアンタに一生付いていく覚悟……は、ぶっちゃけ正直してなかつたけど、これからしてみせるつもりさつ！ と、脳裏を駆け巡ることわずかコンマ何秒。

「すまない、今の話は無かつたことしてくれ

店長がカウンター横のレジを開けて茶封筒を手にした。さらこそレジに入つていた数枚のお札を無造作に取り出すると、そのうちの

何枚かを茶封筒にねじ込んだ。

「今月分の給料と、少ないがこれはこれまでの君への感謝の気持ちだ。受け取ってくれ」

「え、いや。そんな、いいですよ」

いいんだよつ！ そんな一、二日で繁華街の居酒屋に飲み込まれた金よりも、将来の安定を俺に与えてくれつづーの！ ん？ までよ。ロツカーが安定を求めるなんて何かおかしくねーか。例えば公務員やつてるクセに『国のバカヤロー』なんて歌つてた奴が本当にロツカーって言えるのか？ と、脳裏を駆け巡ることわずかコノマ何秒。

「何も言わずに取つておいてくれ。それに、まだ若いと書つてもこの不景気じや仕事を探すのも大変だりつ。失業保険といつわけじやないが、足しにしてくれ」

「…………いや、その」

すると店長は深々と俺に頭を下げた。俺が「頭を上げてください」と何度も言つても聞く耳を持とうともせず。何だかここまでされると居心地が悪い。結局、俺はそのままスタジオから引き上げることにした。

「はあ……。なんかドツと疲れた……」

店の外に出るとスタジオでの緊張感もあいまつて、吹き付ける風が無性に冷たく感じる。

「東京かあ……」

「このクソ冷たい空気がどこかで生まれて、今俺の頬に風となつて突き刺さると同じように、俺の知らないどこかで、ひょっとすると何がが動き出しているんじゃないか。そんな風に感じたその時、突然その娘は現れたのだった。

「おはよー」「やあこまゆ」

「あ、理恵ちゃん。おはよー」

「うわー今田俺に給料を渡すって事を店長から聞いたらしい。つまり彼女はわざわざ俺に会う為に口口まで駆けつけてくれたってワケだ。まてよ、おい、これは今朝の星占いビンゴの風向をじやないか。じこを辞めた今、もう彼女ともそういう顔を合わすことは無いはず。」

男なら……今日決めるしかないだろ

俺の中で何とも意味不明な自信が沸騰し、ヤカンから熱湯が噴出している。

「ちよっとだけ、時間いいですか?」

「もちろん! ガス漏れチェックOK!」

「……? ジゃあじこの公園でも行きます?」

いやはや、それにしてもこんなベタな展開があつて良いのだろうか。俺は今朝の星占いを一語一句忘れちゃいない。

「 今日の蟹座のあなた! 突然の恋のチャンス。あなたの魅力が最大限に發揮できる一日です」

本当の事を言えば前からめちゃくちゃ理恵ちゃんのことが気になつていた。いつも笑顔で明るくて、俺らのバンドの事を真剣に応援してくれて。瞳パッチリあばたもエクボな存在だった。それに気づいていて何となく彼女の親である店長という存在の手前、自分の心を騙してきたフシがある。

でも、もう失う物なんて何もない。」うなりや本気の俺を理恵ちゃんに伝えるべきなんだ。

公園のベンチに腰を掛ける一人。さつきまでのスタジオとはまた違つた緊張感が張り詰める。俺は彼女の……、いや、自分自身の気持ちをほぐす為、まずは音楽活動の今後について触れてみるとした。

「スタジオ閉めたら理恵ちゃんのバンド練習も難しくなるんじゃない？」

「そうですね……。っていうか、テルセヒビするんですか？」

「俺はまあ、ギターさえあれば練習も家で出来るし……。もうバンドじゃないからさ」

「あ、そうじゃなくて……。えっと」

「……？」

そうだ、すっかり忘れてた。俺は今、完全に無職なのだ。フリーターのフー太郎ではなく、二ート……じゃねーぞ。無職のギタリスト。……ま、あんま違わないか。

とにかく理恵ちゃんの心配を取り除いてやらなきゃ。もし彼女と付き合っても、カレシが無職はそりゃ厳しつしょ。

「うーん、いや、仕事は何とか見つかるし。バイトなり選り好みしながら幾つでもあると困つてくれ」

「……」「めんなさい。父さんのせいで」

「なんで？ 理恵ちゃんが謝らなくてもいいじゃん。気付くんなつて」

少しば笑みを浮かべたけど、何だか理恵ちゃん凄く凹んでいる様子だ。確かに数少ない練習場所が無くなるのは困るけど……。とにかく彼女がいつものテンションじゃないとせ、何となく感づいていた。

てか、こんなことじゅうぶんのコード作つもままならない。軌道修正を掛けるべく、気付かなければこの間にか彼女を励ますことに必死だつた。

「ほら、学校の音楽室とか借りればできるこの練習。そうだよ、いつも軽音部でも作つちゃつて……」

「うそ、やうですね……」

何だか話がズレてこる。わざわからの俺の言葉が全く彼女に響いていないのは、女心に鈍感な俺でも何となくわかる。せいやうスタジオを閉める事とは次元が異なる世界で悩んでいたのだ。

まてよ。ひょっとすると彼女、本当は俺に告むつもりで今日来た

のかも。なるほど、やつさから音楽の話がやけに右から左に流れていくのもそれなら一理ある。つまり、俺がそつちの話ばっかりするから、彼女は切り出すタイミングが無かつたんだ。そつと分かれば……。

「…………うーんと。それはそつと今口令えるよな」

さうだい、この俺の絶妙な話題転換。これで少しの間遠くを見ていれば、それなりに彼女もそつちの話を切り出しそこ空氣になるつてもんさ。

ん、まてよ。でも女から告白せられてのせ、ロッカーとしてどうなんだ？ やつと痛いよな。やつぱりいつま黙らしく俺から切り出されなきや。

「あの、れ…………」

すると俺の言葉を遮るように理恵ちゃんが唐突にそれを切り出しつてきた。

「実は…………」

「え？ あ、うん」

「ウチの両親…………。離婚することになったんです」

「…………せ？」

「私が、どうしていいのかわからなくて…………」

唇を噛み締めて俯く理恵ちゃん。想定外のその話題の前に、俺の脳内の台本に書き上げた、浅はか過ぎる告白プランが物音を立てて崩れていった。

帰路に着く俺にさらに手厳しい冬の風が吹き付ける。自転車を漕ぐ気力もどこか抜け落ち、やけに重く感じるそいつのハンドルを握りトボトボと歩く俺。

結局彼女とはそのまま別れちまった。何一つアドバイスや元気づける事もできないまま……。音楽の事ならまだしも、離婚なんて全く縁もゆかりもない話題にどう応えれば良いのか。

「つでかさ、んなテーマ重すぎるつーの……」

ついついボソッと呟いた。俺お得意の大きな独り言だ。

その時だった。ふと何故か分かんないけどケインの顔が浮かんだんだ。

「……バンドの解散も似たようなもんだよな

思えば「バンド組もうぜ」って言って誘つたのは俺だった。一人してあーでもない、こーでもないと、作詞や作曲では「フレーズが変だ」とか、「リフがしょっぱい」って喧嘩もした。その翌日にはケロつとした顔して、つまらない話で笑い飛ばしたつ。

アイツと俺は赤の他人同士で、性格も全然真逆だけど、同じ目標目指して頑張ってきたんだよな。そんな一人が別れる理由つて……。

「そつか！ そうだよ、一人の目標がズれたんだよ」

あれ？ そういうや俺の田標つて何だったっけ……。それに、ケイ
ンの田標つて……。

「……。ああ、悪い。お前も届たつけ

考慮の片隅で「俺の存在は無視か」とマッヂョが小気味よいステップを踏み、タンバリンを叩き鳴らしながらこじらを窺っている。忘れてたつむりはないが俺の脳裏でコソコソすんなよな。

その時だ、後ろからその声が近づいてくる。

「デルセーん！」

振り向くと向こうから自転車に乗つてやつてくる彼女の姿。小柄でそんなに体力も無いクセに全力疾走してゐる。その姿はもはや後光どりではなく、全てが輝いているじゃないか。ヤバイ、このシチューションは……俺好みだ！…………じやなくて。

「良かった……。追いついた

「どしたの？」

息を切らし呼吸を整える彼女に思わずクラッときちまつたが、俺はロッカーらしく平然を裝つ。

「あの、さつあはー」めんなさい。急にあんな話して

「……いやあ、で？

「それだけ言わなきゃつて

「や、それだけ？」

「はー」

「……。わざわざこんな事を囁ひに来いって。」

「マジか。おこおこ時代は平成だね。この娘どもだ抜け純粋なんだよ。わざわざクラクラシとあつあつたが、俺はロッカーひしく平然を装つ。」

「いや、それより俺も向こにも励ます事できなくて」

「いこんですー。誰にも言えなこ話、聞いて貰えただけでも凄く嬉しかったです」

「や、やつ」

「だから、わざわざ話せなかつたことにしておくれー」

「はは、そのフレーズが今日一度田の轡をだとハントしたもんだから、ついに言つちました。」

「はは、わざわざ来たのに何も言わなかつたよ

「え?」

「やっぱ親子だな

「……えー。それショック」

「え？」

あれ？ 僕何か悪いこと言つたっけ？ いきなり不機嫌な顔をした理恵ちゃんにちょっとパ一くつた俺。だが、そこは目だけキヨドつて平然を装う。

「私、ちゃんと考えます。父さんが、母さんか……どうひに付いて行くかわからんないけど、音楽も頑張つて続けます！」

「うん、それで良いじゃん！ 応援してるからやー！」

すると理恵ちゃんは携帯電話を取り出した。

「あの……。良かつたら、デルさんの番号教えて貰えませんか？」

き、キター！ 突然キター。完全に消えかかっていた俺のコンロに火が付き、猛烈な勢いでヤカンの水が沸騰する。もちろん、そこは燃えたぎる俺の想いにそつと蓋をして「こつちこそ喜んで」と赤外線通信を始めるのだった。……おっと。緊張からか、うまく通信出来ずに一度、三度やり直した事はオフレコだ。

「これからも音楽の事とか相談に乗つて貰つてもいいですか？」

「もちろんー。気にせず何時でもー！」

思えば、彼女の電話番号すら知らなかつたんだよな。てか、そんなこと簡単に聞ける環境でも無かつたし。相手は密でもあり、まして雇い主の娘なんだから……。

「有難うござります！ じゃあまた！」

「うん、気を付けて」

やつと理恵ちゃんの笑顔が見れた。それだけで何だかすんごく満足した気分だつた。……この時だ。俺は彼女の笑顔にずっと癒されきたんだなつて改めて思い知らされたのは。

家に帰つて部屋に戻るとさつときまでの鬱な自分はどこかに飛んでいた。もちろん、あの後は自転車も軽快に漕いで帰つてきただけだ。自分で表情が緩んでいる事が良く分かる。告白は出来なくても、とても清々しい気分だつた。

「ま、これからゆづくつとな」

大きな独り言も快調な午後のひとときに、ふと疑問が湧いてくる。店長が東京に行くつて事は、理恵ちゃんが父親を選んだら……。

「おいおい、それつて

そうだ、もしさうなつちまつたら「これからゆづくり」などと悠長な事言つてゐる場合じやない。いやいや今まで、高一の彼女にとつて来年は受験じやないか。大事な時期に転校なんて難しいよな。きつと母親と一緒にこの町で暮らすに決まつてゐるつて。……でも、万が一彼女が父親に付いていくつて決めたら。

「俺……行けるのか。東京に……」

すると階下からオカンの苛立つてゐる声が聞こえてきた。

「ちよっとー 飯冷めるじゃないのー！」

「……はーはー。今降りるよー」

この際、電話番号とかメアドだけじゃなく、心の赤外線通信も出来りや良いのになーと、何となく感じた俺だつた。解散、無職。それでもそん時はまだ、理恵ちゃんつていう光が見えていたから、少しくらいは余裕もあつた。でも、そのゆとりは永く続かなかつた。

新年を迎える、数日が過ぎたある朝だ。俺はホテルのベッドでのたうち回っていた。どうも昨日の夜食べた「コーヤチャンブル」が原因なのかもしれない。何か思っていた以上に苦かった。だからすこぶる胃腸が芳しくない。

窓から差し込む光に誘われて、俺はノソノソと窓辺に立った。一面に広がる青い海。これが本当のオーシャンビュー。少し高かったけど、どうせならこの景色を見ておかなきゃな。

俺は独り沖縄に来ていた

怒涛の年末、そして廃人と化した年始。身も心も疲れ果てた俺が選んだ場所がココだった。

仕事を探しでもなかなか決まらず、家に居てもオカソやオヤジの顔色を窺う毎日に発狂寸前になり、有り金全部預金通帳から引き出して「ちょっと出て来るわ」とギター片手に家を飛び出したんだ。ま、『ちょっと出て来る』って距離じゃないが。

ホテルの部屋から出た俺は、すぐ傍にあるプライベートビーチに訪れると、穏やかに波打ち寄せる砂浜にドカッと座り込んだ。シーグンオフの平日。宿泊客らしき人もまばら。その名の通り殆ど俺だけのビーチ。

「……すげーな」

なんという解放感。この間までの苦痛の日々が洗われていく……つて、簡単に心を洗えたら苦労しねえ。ま、一月といつともあって、多少は冷ややかなこの潮風も、あの時の突き刺さるような北風に比べりや凡とすりぼんだから良しとするか。

以前、『ヤントリ』といつ言葉を耳にした。恋に病んだキャラクターの事を指すらしい。が、俺はその一步先を行く。これは『ヤンダラ』だ。最近は精神的に病んだ奴が、何故か沖縄に訪れる傾向にあるらしい。病んで沖縄でダラダラする。これまさに『ヤンダラ』実行中のこの俺だ。そのうちウイキペディアにも載るかもな。

一面の水平線を眺めるつむじ、幾つもの言葉といつ言葉が駆け巡つていぐ。あの大晦日の夜。理恵ちゃんから初詣で賑わう神社の外れに呼び出された俺。

「色々と心配かけて」めんなさい

「いや、でも理恵ちゃん自身が決めたんならそれで良いんじゃない

「昨日も、一昨日も全然眠れなかつたけど、やつと決心ついたら何だか気が抜けちゃつて」

「だよな。いや、真っ先に俺に話してくれて嬉しいよ。……まあ、理恵ちゃんと離ればなれになつたら店長は寂しいだろうけど

「どうかな……。私のバンドの事も認めて無かつたし」

「そんな事無いと思つたんだなあ。東京に行っても、きっと店長は陰

で応援してると思つよ。たとえ離婚したつて理恵ちゃんの父親に変り無いんだから」

そん時は俺もホツとしたんだ。理恵ちゃんが父親では無く、母親と生活するつて決めた事に。今の病んだ俺に必要なのは東京という街の魅力より彼女だ。理恵ちゃんとの関係を大切にしようつて思つていた。

「やうやく、あの後店長から電話あつたんだよ」

「え?」

「いや、改めて言われたんだ。『東京に来る気は無いか?』って

「ホント?」父さん、そんな事言つたんですか?」

「なんだ知らなかつたんだ。いや、あれで店長も俺の事気遣つてくれてんだと思うよ。だつて仕事はあるし、音楽だつて続けられるし。この町と同じ生活を送れるワケじやん。……それに、何より東京なら色々とチャンスも増えるだらつし」

「やつかあ! 父さんも結構良いくつあるじやん」

「でしょ? だからきっと理恵ちゃんの事も応援してゐつて

「それで、テルさんはどうするんですか?」

「え?」

正直言えば即答で「行かない」つて言える気持ちだつた。でも、

スグに答えずに言葉を濁したのは、理恵ちゃんの父親つて事への配慮もあつたわけで。

「いや、うーん……。まだ決めてない」

だけど、実際はどこかで音楽という夢が俺の中に残っていたのか
もしれない。だから、自然と「行かない」って言葉を抑えつけたん
だ。

「ですよね。そんな簡単に決められないですよね」

「やっぱ、親を残して飛び出すにはなかなか勇気が居るもんだぜ。」「住みなれない街に出ていくのはやっぱ不安もあるよ」

「あはは。確かにこの町、なーんにも無いけど凄く居心地良いです
よね」

「そりそり、 なんだよ、 愛着つて いつかなんて 言いつか」

「だから私も凄く迷つたんです。でも、どっちを選ぶつてなつたら、やつぱりお母さんの方かなつて

「うん、なるほどね」

「だから、『住みなれない町』出てこく勇氣』つてすうじく良く分かります」

「私、北海道なんて行つたコトないから」

「……はい？」

「母さんの実家、札幌なんですよー」

「……」

「……？ どうしたんですか『テルちゃん』？」

その後の彼女との会話の内容は、あんまりおぼえてねえ。

どこまでも続く水平線。その向こうには一面の海と窓しか見当たらない。でも、それは俺がここに立ち止まっているからだ。俺が一歩踏み出せば、必ずその先には陸地が存在する。そこには今の俺には想像もつかない道があり、出会いがあり、夢がある。

「踏み出す一歩かあ」

ふと立ち上がった俺は何気なく波打ち際まで踏み出す。そんな俺をめがけて勢いよく白波が足下に押し寄せる。

「なんだよーー！ 沖縄の海のクセに冷たいじゃねーかつてー！」

スゴスゴと後方に退散する俺。一歩踏み出すつたつて、今の俺には船も無いじゃねーか。

「はあーー

再び砂浜にぱつたりと腰を下ろす。分かつてゐる。踏み出さなきやいけないつてことは。でもさ、あまりに神様は残酷だ。どん底でもいいよ。でもせめてや、恋でもしてつや多少は音楽へのモチベーションになるつつーの。それすら引き離しちゃうんだもんなー。

「はあーせだやだ

俺はその場に大の字になつて窓を見上げた。雲のんびりと果てしない海の向こうに流れゆく。出来れば相乗りでいいから俺も連れてつてくれねーかな。

「「Jのまま町に残るか、思い切つて東京か。それとも……」

その雲に誘われるように今一度田の前に広がる大海原に田をやつた。そうだよ。結局今の俺にとつて理恵ちゃんとは何にも始まつてないし、何にも終わつてねえじゃねーか。

「……新天地が札幌つてのも、悪くはないよな。……うん、そうだよ」

その時、何だかすん「J」へ気持ちが楽になつたんだ。半ば強引に自分自身を諭しているようなもんだつたけど。俺はズボンのポケットに突っ込んでいた携帯電話に手を伸ばしていた。

「あ、い、う、え、小川理恵つと……」

その名前を呼び出し、通話ボタンに指を乗せると、呼吸を整えるべく一息ついた。決意が鈍る前に彼女の声が聞きたかつたんだ。

「つしゃーー」

意を決し押そうとした時だ。画面から『小川理恵』の文字が消え失せ、同時に懐かしい名前が表れた。さらに追随するかのように、その昔何度も聴いた着メロがそいつから発せられた。

「もしもし……」

思いのほかスマートにその着信を受け入れた。意外な人物に一瞬戸惑つたが、何よりこの沖縄という土地が、気持ちをおおらかにしてくれていたのかもしれない。そいつは当時と変わらない明るい声

で喋りかけてきた。

「やつほー。ケタロー」

「……何だよ」

「久しぶりなのに『何だよ』ってことないっしょ。ケタロー」

「あのさあ、いい加減その呼び方やめてくれよ」

「あー、何？ まだ嫌いなんだ？ ……つたく成長してないねえ」

「いふむせえ」

「でさあ、ケ・ケ・ケ・ケ・ケータロー」

「……てめえ」

電話の相手は和泉 薫。いすみ かおり 僕がバンドを組む前。高一の頃に働いていたバイト先で知り合って、たつた一週間で意氣投合し、イケイケドンドンで付き合つた。が、たつた三ヶ月で別れちまつた元カノだ。

「ケタローと電話すんの三年ぶりくらいだよねー」

「チツ、何度掛けてもお前が電話に出なかつたんだろ」

「まひ、そつやつて自らを省みず、人のせいにするトコもまだまだ成長しないねー」

「いふむせえ。その上から田線も変わんねーな」

「当たり前っしょ。アンタより五つも先輩なんだからね」

「五つ……。そつか、へえ。薰つてもう一十五歳になつたんだ。へえ、一十五ねえ……。うひやひや。一十五かあ」

「……アンタ。張り倒されたいの?」

「いや、『ゴメン。すいません。調子に乗りすぎました』

「それよつさあ、今ナニしてるの?」

「沖縄で『ヤンダラ』中ですが何か?」

「は? ……シシ『ミ』所が多くて困るんだけど」

俺は妙に落ち着いていた。心が凄く落ち着いていた。懐かしさといふか、久々に会話できた嬉しさといふか。^鬱だつた俺の気分が、この青い空のように急速に晴れやかになつていて。この穏やかに流れゆく沖縄の時間がそれを後押ししてくれたのかもしれない。

俺は「薰になら良いか」と、この年末年始にあつた出来事を全て打ち明けた。薰は節々で嫌味なチヤチヤを入れてきたが、それもまたあの頃繰り広げてきた俺たちの『ミコニケーション』だった。

「やうかあ。色々あつたんだねえ」

「まあな」

「で、どうすんのよ? その、理恵ちゃんを追つかけて札幌行くの

？」

「……。まあ、今はそういうかなと」

「はあ……。アンタも、バツカじやないの？」

「うう……。言われなくても分かってるよ。でも今はそれしか考えらんねーんだよ」

「わっかあ

「わっだよ……」

「でも、アンタたち付き合っても居ないんだよね？」

「そりゃ、そうだけじゃ」

「なのに、札幌？」

「まあ

「……えーっと

「……ん？」

「バツカじやないの？」

「ガツー！ うるせーな！ 別に付き合いつとか、付き合わないとかそういう二つのどちらでも良いんだよ！ 今はこんな俺の曲でも応援してくれる彼女の存在が唯一の原動力なんだよー！ 放つておいてくれ

つて！

思わず語氣を荒げちまつた。と、微妙な間が携帯電話の向こうから漂つてきた時、こんな俺でも「しまつた」と内心感じた。元カノ相手にハツ当たりしてこんなのどう考へてもみつともないのは分かつてゐる。でも、それがその時の正直な俺の答へだつた。

「……ま、いいわ。とつあえず今はヒマしてゐるんだよね？ ケータローー」

「ああ。でももう決めたんだ。今日にも沖縄から家に帰つて仕度をするつもり」

「だから、今日はヒマつて事だよね？」

「……？」

次の瞬間、俺の真横に忍び寄つてきた人影にゾクつとした。風になびく花柄のスカート。見上げると太陽に映える真っ白なシャツ。そして胸元まで伸びた長い髪。その時俺は顔を確認するまでもなくそいつの正体を理解した。

「は？ ……はあ？ 何でお前がココに居るんだよー？」

「はいはい、その前に……。わたくしの『一十五』の件について」

フルスイングされた薫の細い右腕から繰り出されたラリアット。見事に張り倒された俺は、そのサラサラしたビーチの砂に、したたかに頬を打ち付けたのだった。

陽も暮れかけていた頃、俺は薫の運転する車に乗っていた。まさかこんな場所で三年ぶりに元カノに会うなんて、何という偶然。いや、「これはもしや必然?」……んなわけないか。

三年前。薫はかねてから希望していた東京に本社のあるイベントハウスの就職が決まり、俺と知り合ったバイト先を辞めて、そのまま東京へと発つて行った。

その頃ちょっとした意見の食い違いが重なって、あんまり口も訊かなくなっていたこともあり、薫との関係は結局そのまま自然消滅みたいな感じで終わっていたんだ。その理由は……東京に一緒に行くか行かないか。

「さて、着いたよ」

薫に言われるままついてきた俺。そこは那覇市内にあるライヴハウスだった。

「いらっしゃいませ」

「「ひんばんは。もう始まってるんだね」

そう言つと薫はバッグから何かしら身分証らしき物を受付に提示した。すると特に制止されるわけでもなく、いや、むしろ「お待ちしておりましたご主人様」的な対応で中へと通される。何者なんだコイツ……。

防音扉の中に入ると生暖かい空気と共に、小気味よいビート音やら何やらじりじりした返す、騒々しい音の羅列が飛び交っていた。そう、何の事は無い。これはほつゝ先日まで俺らだつて出していた音と空氣なんだ。

思えば聴く側の立場でライブハウスに入つたことは初めてに近いかもしれない。こうして予備知識も無くふらりと立ち寄る場末のライブハウス。そこでどんなミュージシャンが、どんな音楽を提供してくれるのか。好き嫌い関係なく、毎日多彩な顔ぶれが登場して新鮮な音を楽しむことが出来る。それがこの手のライブハウスの良さなんだよな。

「俺らのバンドの事なんか知りもしない客は、こんな気持ちで入つてたんだろ? なあ」

「え?」

「いや、大きな独り言」

ステージでは数名の若者、といつても俺と同じ年くらいかちょっと年下くらいの連中が、マイク片手に客を煽りながら唄い、演奏している。薫によれば那覇市内でも指折りのライブハウスがビックシリ埋まっていた。それも殆どが中高生くらいの女子だ。

……ヤバイ。さつきから非常に居心地悪いのは何故だ。今まさにステージで音を出すコイツらと、さほど変わらねえ歳のはずなのに。どうか、ぶっちゃけ俺たちの演つてた音つて、こういう女子中高生を相手にするようなモンじゃなかつたんだ。俺たちはロックンロー^ルやつてたんだよ。どうりでこの環境に慣れないワケだ。

「……！」

ステージの彼らよりも、むしろ客席に圧倒される俺に驚いた。何だろう、この歯がゆさは。そしてそれと同時にステージで歌い、演奏する彼らを見て湧き起る悔しさは……。

……そりゃからズキズキ感じるこの場違いな感覚は、客層とか聞き手の問題じゃない。ただの未熟な自分たちの音への慰めに似た強がりだったんだ。そして、音を楽しんでいる大勢の客の前でパフォーマンスできるステージの彼らに対する嫉妬心。

すると薫が俺の耳元で尋ねてきた。

「ねえ！」

「は？ 煩くて聞こえない！」

「彼らの音楽！ どうよ？

「は？ どうして

「若くて勢いあるよね！」

「そうだなあ。……てかさあ、俺はこうこうチャラチャラしたバンドってあんまり好きじゃねえんだ

「チャラチャラ？」

「ああ！ それにほら、メンバーにラッパーまがいも居るだろ？ 正直、ウケ狙いであこうのやつてる奴らって無いわあ

「ああ

「ウケ狙いねえ……」

「とにかく俺はあんまり好きじゃねえな！」

「でもさ、ただのウケ狙いでこんなにお客さん集まるかな？」

「えー？ 何て？」

「何でもー、とにかく暫く彼らの音聴いてあげてよ」

正直言えばさつさと引き揚げたかった。それに元々今日中には家に帰る予定だつたんだ。それを「明日に延ばして」って薫がしつこく言うからわざわざついてきたのに、何で聴きたくもない連中の音に付き合わされなきゃなんねーんだ。……そりや今夜の宿代まで出すつて言い出したから根負けしちまつた手前、今更文句を言つてもしうがねえけどさ。

本当にそれくらい俺の嫌いな音だつた。ステージの連中の振る舞いも、中高生に媚を売るような音も無性にイライラした。……そう、それも結局俺のただの嫉妬心だつたんだ。その時はそこまで気づけなかつたけど。

それから約一時間近く、俺はことん居心地の悪い感覚に包まれたままその場でボーッとしていた。きっと周りの中高生は「何なのコイツ？ 鬱陶しいから帰れよ！」って言いたくなるほどこ、俺は不機嫌極まりない顔をしていたに違いない。

聴きたくもないアンコールに一、二度、三度と付き合わされ、精根尽き果てた俺を尻目に、エネルギーを発散しスッキリした表情を浮か

べ、ステージの余韻を引き連れた中高生たちが、キャッキャ言いながらライブハウスを出していく。

「対照的とはこのことだなあ」

と、『氣づくと薰の姿が無い。思えば俺はホールの隅っこに出番なく申し訳なさそうに佇んでいたテーブルと共に、盛り上がるステージに田もぐれずチビチビと酒を飲み続けていただけだったんだ。確かに「おつとこに居てね」と言い残し、薰はどこかに消えたんだ。

「ビに行つたんだよアイツ

すでに客の居ないホールではライブの後片付けが始まっている。一応薰の連れつてことが伝わっているのか、取り立てて退場を迫られることも無く、俺はそのままテーブルで薰を待っていた。すると薰がニヤニヤしながらひりひりへやつて來た。

「お疲れー

「ビに行つてたんだよ

と、薰の後ろからゾロゾロと若手集団がやつて來た。

「じゃーん。彼らが今沖縄で注目されているバンド、『黒南風』だ
よ

「どうも、初めましてー。」

「ーとばんはー。」

どうこうことだ。つこさつこまでステージで演じていた六人のチヤラ男……。もとい、メンバー達。その全員がめちゃくちゃ低姿勢で俺に挨拶してきたじゃないか。

「…………」

「で、彼がさつさつ言つたギタリストの『デル』

「今日はわざわざ僕らのライブに来ていただいて有難うござります！ 僕、黒南風のリーダーやってる島村 しまむら 兼一 けんいち って言います。『シンマケン』って呼んでください。今後ともよろしくお願ひします」

「あ、いやいっかく……。えと、『デル』です。よろしく

その後、メンバーひとりひとり、しつかりと礼儀正しく自己紹介してきたじゃないか。なんなんだこの好青年達は……。

「僕ら和泉さんにはいつもお世話になつてます」

「お世話つてホドじやないつしょ

「あ、そりですね。ホントかなり、お世話になつてます」

「アハハ、何それ？」

何だか楽しそうに盛り上がる一人。俺はただただ苦笑いするしか無かった。つていうか……薰コイツ 一体何者なんだ？

「デルさん、僕らのステージどうでしたか？」

シマケンが唐突に問い合わせてきた。正直、この質問は予想できた。が、さつきまで薫の前でボロクソに彼らを批判していた俺が「口に居る。

「……う、うん、いや。そうだなあ」

もへ、とにかくここから逃げ出したい一心だった。

シマケンのその問いかけに言葉の詰まつていいる俺を察したのか、薰が助け舟を出してくれた。

「彼も言わばライバルだからね。そんなの簡単に答えられるワケないじやん」

「ははは、そうですね、すみません変な事訊いて」

「え？ いや。でも、新鮮だつたよ。あんまり好んで聴かない音だから」

「あ……。そ、うなんですか……」

少し寂しそうなシマケンの言葉。ふと横に居る薰を向つと呆れた顔でこいつを見ている。ようやく大馬鹿発言を口走つたことに気がついた俺だった。薰、すまねえ。

「でも、最後までここに残つて頂けただけでも僕たちは満足です。デルさんのよつこ、まだ僕らを知らない人達を振り向かせられるようなバンドを目指して頑張ります」

「よつ、格好いい。シマケン」

「茶化さないで下をいよ和泉さん」

「いやいや、今のコメントはとても十六には思えないしっかりしたもんだよ」

「じゃ、十六歳？」このシマケンが？ とこいつとは「イツらまだ高校生かよつ。もう驚かないと思っていた俺が流石にこれには愕然とした。

「じゃあデルさん、また夏にステージで会えるといいですね」

「は？ ステージ？」

「頑張りましょうー」

「あ、うん……。頑張ろ! つな」

メンバーが次々と俺に握手を求めては、薰にもきちんと頭を下げて樂屋へと帰つて行つた。演てる音楽は大嫌いだが、最後まで憎めない奴らだ。ともかく、想像も出来ない事がこの数時間で駆け巡り、俺は頭の中を整理することで精いっぱい。彼らが去つた後は暫く力が抜け落ちた俺だった。

「ライブどうだつたケタロー？」

ライブハウスから帰る車の中、まだ頭の中が混乱している俺をよそに、薰は何だか楽しそうに問いかけてくる。まず山ほど質問したいのはこっちの方だ。

そもそも薰は**【ハイ】**何者なんだ。ライブハウスはほぼ顔バス、演者には慕われ、おまけにこの車は明らかにレンタカーでは無い。あまつさえ今日の俺の宿代まで出すとか言い出したくらいだ。どうやら金にも全く不自由していないらしい。とにかく薰の今の状況を聞いてお

きたかった。

「やれよつせあるお前……」

「うようとませスッキリした?」

「は?」

「今朝聞いた話だと、ケタローって暫く音楽から遠ざかつてつたみたいだからや」

「……ああ、確かにな」

「良かつた。ライヴ誘つて正解だつたね」

「まあ、多少は気晴らし……。ってか、そんな事でわざわざ俺を誘つたのかよ」

「やつだよ? 何か問題ある?」

あつからかんとした顔で薫はクスクスと笑う。何だ、バカにしゃがつて。そりやお前の言つとおり確かに音楽から遠ざかつてついた。星占いの責任にして逃げてついた。一応、沖縄までギターは持つて來たけど、バンド解散以来暫く怠いでなかつたせ。ああそつせー。

「やつぱり音楽つて良いよね。嫌なことも忘れられる」

「ん……。まあ、な」

とは言つたものの、好きでもない、むしろ嫌いなタイプのバンド

の音を聴いてスッキリするわけねーだろ。あんなのにキャーキャー言つ奴も、もつと他に聴くモノあるだろ。そうさ、俺があのステージに立つてたらもつとこいつガングンに本物のロックつて奴を……。

「……。」

「どうしたの？」

「……何でもない」

認めたくなかったけど、確実に俺の中で変化が起きていた。アイツらのライブと、それに熱狂するファンが焼き付いている。俺だって少し前まではああやつてステージで自分を表現していた。数じや劣るけど手拍子してくれる客だつて……。何より応援してくれてる女の子だつているんだ。すると再びあのライブハウスで感じた悔しさがこみあげてくる。

「あーあ、何やつてんだ。俺」

確実に聞こえているはずのその大きな独り言に、ハンドルを握る薫は何も言わずに前を向いている。俺は結局薫に踊らされているのかもしれない。でも、やっぱりコイツには敵わないようだ。出会った三年前からずっと。

暫くしてホテル前のロータリーに着いた。よもや、このホテルにもう一泊する事になるとはなあ。すると、車から降りた俺に薫が運転席側から身を乗り出し話しかけてきた。

「『めん、ケタロー。私これから仕事あるから』

「仕事？ こんな時間からかよ」

「打ち合わせしなきゃいけないからさ。今日はいいでバイバイね」

「ちよ、お前イベント会社に就職したんだよな？」

「やうだよ。ま、詳しきはまた機会あつたら今度ゆつくりね……。
あ、そうだ」

すると薰はバッグから名刺を差し出した。俺は月明かりに照らされたその名刺に目を通す。

「……株式会社ＺＯＷ、企画部主任、和泉薰……。しゅ、主任？」

「おいおい、わずか三年でどんだけ出世してんだよ。そりやまあ薰は頭もキレるし、行動力あるし、それなりに美人でもあるけどね……。あ、美人はあんま関係ねえか。

「ごめんね。明日も見送りは出来ないと思つけど、気を付けて帰つてね」

「オカソカ。人をガキみたいに言いやがつて」

「そ、ならいいけど。その意氣その意氣」

「チツ、じゃーな」

「バイバーイ」

助手席のウインドウが閉まるのを見届けると俺は軽く手を振つた。

が、再びそのウインドウが下がり始める。

「……？ 何だよ。忘れ物でもした？」

「好きな子の傍で音楽続けたいっていつの、私は嫌いじゃないけどね」

「はあ？」

「行つてきなよ札幌。それで元気になつて音楽続けられるなら。ケタローのギターなら場所なんて関係ないよ」

「お前、何言つてんだ？」

「だから……、札幌行けよバーカ！ 大バカ！ アホッ！ ドアホツ！」

まあその顔に似合わない暴言を吐き捨てたかと思いきや、フルスロットルでロー・タリーから国道へと疾走していく車。俺は何にも言ひ返すことも出来なかつた。それが、あの夜のアイツとダブつて見えた。

何で、三年前に会つちまつたんだろうな。今の俺なら、それもこれも受け止められたのにな。それは、やつぱり少し肌寒い沖縄の夜の事だった。

ホテルの部屋に入るとそのままベッドの上にびっかと大の字になつた。まだ耳の裏でキンキンと音が弾けている。あのライヴハウス、音響工学過ぎだろ。

「黒南風かあ」

ふと、妙な寂しさがこみあげてくる。俺にとつてあのライヴは、はとてつもないインパクトを残していた事に改めて氣づかされた。せめてもう少し薰と話でもして、このどひつよひつもないもどかしさを抑え込みたかった。

すると、タイミングよく鳴る携帯電話。俺は今朝の再来に胸を躍らせ、勢いよく飛び起きて待ち受け画面を確認する。たが、その発信元の名前を見た瞬間、あっさりとその淡き期待はぶち壊された。

電話の主はあの解散の日以来、メールすらしてなかつたマツチヨだつた。ああ、そういうや一度だけ俺の脳裏でタンバリン叩いて登場したつけ。コイツ、なかなか要点を突いて登場しやがる。ただ、この寂しさを紛らわすために、誰でも良いから話したかつたことに変りは無かつた。

「オイッスー」

「オイッスーじゃねーよ。お前どこで向してんだよ

「んー、沖縄でヤンダラ中」

「沖縄？ マジかよっ。」

「マジン山」

「意味わからぬーし」

「」の沖縄に来る」とすり向も告げずて家を出てきた俺。ここに来てから三田田。親からの電話をことごとく拒否つてたせいで、心配になつたオカンがマツチヨの所に電話を掛けたらしく。とりあえず俺は「一人旅で沖縄に来てこる」とだけマツチヨに伝えることにした。

「 ま、そういうワケだから、明日こもそつち帰るし心配すんなつて」

「分かつた。でもな、家には早めに電話してやれよ。お前の母さんかなり心配してたぞ」

「わーつた、わーつた。そりだ、そんな事より、あの後そつちどうつて」

「ビウヨウドウ。」

「いや、ほら、ドラム呑けなくてストレス溜まつてんじゃねーかなつて」

「おひ。だからこの間、新しいバンド組んだよ

「……は？」

「前から大学の仲良い連中から誘われてたんだ。で、『解散したなら是非 つてことだな』

「はあ。そつか……」

マッシュの新しいバンド、その名も『キャプチュー』。意味は捕獲するとか捕まえるってことじりとへ、一度掴んだ客は手離さない音楽を田指すらしに。つーか、電車にドラムスティック忘れる奴が客を捕まえられるのかつづーの。それもバンド解散の一因だったんだが。……とは、流石に言えず

「まあ、良かつたじやん、頑張れよ」

「おへ、あつがとつ。わつわつお前まだよ~」

「俺は……」

その時、俺は嵐の年末年始を『マイツ』に躊躇つた。

「あ、悪こひよつと用事できた。これで切るわ」

電話を置いて再びベッドに倒れ込んだ。マッシュに今の状況を打ち明けられなかつた理由。きっとマッシュも俺と同じように、音楽浪人やつているつて思つこんでいた。「一人でやり直さねえか」なんて言葉を少しばかり期待した俺が馬鹿だつた。

薰も、マッシュも、さつきのシマケンも。それに店長や理恵ちゃんだつて、もうどんどん歩みを進めていく。今朝見た空の雲にすら乗れなかつた俺は、やっぱり今も浜辺でぐすぶつてい。

「……何やつてんだ。俺

無意識に俺はベッドから起き上がり、部屋の片隅に横たわっていたそいつを叩き起しす。沖縄までわざわざ連れてきた相棒のギブソン・レスポール。久々にそいつを扱いでやると、何だか嬉しそうな音を響かせやがる。

「……酔いつぶれて、……しまいそな」

相棒を扱いでからと「うも、何だか色んなメロディと、詞が浮かんでは消えていく。そうだ、俺にはまだコイツがあるんだよ。コイツに乗せて俺は今の俺を表現出来るんだよ。それが俺のロックじやねーか。

その夜、俺は久々にギターを弾いた。色々なことを背負い込んだその想いの中での、思いつくままに歌い、奏でてみたのだった。気づけば、相棒を横に爆睡した俺だった。

翌日

俺は空港にやつて來た。すでに心の準備は整つている。家に帰つてとにかくオカンとオヤジにちゃんと説明して、まずはあの町から一歩踏み出す。

「行くぞ。いざ札幌！」

どこの通信教育のCMみたいだ。でも、これは教育じゃない。ロッカーとしての生きる道なのだ。……と、カッコよく決めてチケットを買おうとしていた時に携帯電話が鳴った。それはどうにも罰

の悪い相手だった。

「…………もじもじ

「もじもじー アンタビリのー」

オカソの甲高い声が耳元でつぶやいた。俺は適当に話を済ませるつもりでチケットを後回しにして、ロビーの椅子に腰を掛けた話をする。

「…………そういうわけだから、今日元も帰るからね」

「まったく、アンタは何考へてるのー。仕事もしないでブラブラしてるとと思えば、沖縄ってビーチのことなのよー。」

「うそ、いや、分かったから話は帰つてから……」

いやいや、この険悪な状態で帰つてからちゃんと話出来るのどううか。沖縄からやつとドラマ息子が帰つて来たかと思いまや、「俺、北海道で独り暮らするわ」なんて、まさにリアル桃鉄な話が心配性なオカソや、ましてオヤジになんか通じるワケないじゃないか。

このまま家に帰つて親と顔つき合わし、この話をするのはかなりヘビーだ……。その時、俺は腹をへくつたんだ。

「オカソ、『めん。帰つてから言つてしまつたけど、俺、家を出るわ

「えつ?」

「あの町に居ても仕事も無いしさ。そのまま家に居たり、多分また迷惑かけるだらうか?」

「アンタ、何言つてるのー?」

「暫く家に帰らないと思つ。……でも、さやんと連絡は入れるから。心配しなくて良いから」

そのまま俺は電話を切つちまつた。ダメなんだ。ここでまた家に帰つたら親に甘えそうだつた。それに、これ以上失う物なんて無い。もう決めたんだ。

「フーッ。さてと、チケット……の前に」

延泊の代金は薰には払わせなかつた。流石にこの俺でもそれだけは自分自身が許せなかつた。思わぬ一泊をしたことで財布の中身が閑古鳥だつて事に気づいていた俺は、バッグの中の封筒から補充することにした。沖縄に来る前に銀行から引き出した全財産だ。

「……あれ?」

さつきの電話の最中、傍らに置いたはずのショルダーバッグがそこに無い。

「え?」

辺りを見回しても足下に俺の相棒が横たわつてゐるだけ。

「……嘘だろ」

一気に青ざめた俺が立ち上がりロビーの窓を上り端からチェックする。違つ、アイツでもない、アイツも違つ。

「……！」

すると今にも空港のエントランスから外に出ようとする窓の中には、似たバッグを持っている男が居た。

「ちよつ、お前！」

俺は相棒をその場に残し、猛ダッシュでそいつを追いかけたのだった。

冬にも関わらずかりゆしウェアの茶髪のそいつ。みるからに頭も性格も悪そうなヤンキーだ！ そいつは取り立て慌てる様子もなく、悠然とエントランスの自動ドアを通り過ぎて行った。瞬間、対象の姿が消える。

マズイ。このまま車にでも乗られたらおしまいだつ！ ぶつちやけ喧嘩になつたら勝てるかどうかわからんねえやバ そうな相手だ。でも、見過ごすワケにいかねつて！ やつてやるつて！ 追う俺の頭の中で、刑事モノのテレビドラマのBGMがフィードバック。

「待てえ！」

すれ違つロビーの客を払い猛然と犯人を追つ俺は、もたつく自動ドアにやきもきしながらも、よつやく屋外に出る。

「……いたつ！」

そいつはまだエントランス前のタクシー乗り場に突つ立つっていた。俺は猛ダッシュでそいつの背後に立ち、おもむろにそいつの肩を引き聞いたしました。

「おいつ。それ、俺の……

バッグじゃ無かつた。

「ああ？ なんだテメエ」

「あ……いや、すいません」

その男はめちゃくちゃ機嫌悪そうにこちらを睨みつけると、次の瞬間「テメエ、コラ」と胸ぐらを掴まれた。俺は何度も何度も平謝りを繰り返す。しかし、茶髪男の沸点は非常に低い。まさに瞬間湯沸かし器だ。コイツは簡単には許してくれそうもない。俺はいつもこのクセでボソッと呟く。

「……なんだよ、何もマジで刑事モンつぽいベタなオチじゃなくともいいじゃねーか」

「何だ？」何ブツブツ言つてんだ「ラア」

「あ、う、いせ、俺お得意の大きな独り言で……」

俺の胸元を締め上げて何度も揺さぶる茶髪男。頭がフラフラと揺れる中、俺は「アハ……アハ……」と瞼をへの字にしてへラへラ笑うしかない状況。と、その時だ、ふと視界にそれが目に入る。

「……おーつ！」

空港の自動ドアから出てきたスース姿の男。そいつが肩から掛けているそれは、まさに俺のショルダーバッグ。確証は無い。しかし、何よりコイツよりあっちの方が喧嘩になつても勝てそうだ。

「おーっ！ 待てよお前ー！」

俺の一声に驚いたスーツの男は慌てて駆けだした。やつぱりそう

だ、アイツが真犯人だ！

だが俺の今置かれている状況はそれどころではない。

「……お前さ、マジで殺されたいのか」「ハ」

田の前の茶髪でガラの悪い、いかにも犯人的だが実は冤罪だった男が勘違いする。「お前がそんな風貌だからこっちも勘違いしたんだよ！」とはもうひん言えず。

「いや、あんたじゃなくって、アイツなんだよアイツ！」

「おひ、良く分かったよ。つまり……殺されてえんだなオラア！」

「だから誤解だつてえ！ わかんねー奴だなあ！ もう！」

俺は思いつきり足に力を入れ、茶髪冤罪男の股間を蹴り上げた。

「ウッ……」

トップロープに股間をしたたかに打ち付けた、往年のジャンボ鶴田よひしき、その場でゴロゴロと転がり悶絶する茶髪冤罪男。「ホントに悪いー」「メンー！」とだけ言い残し、俺は逃げたスース男を追いかける。

「クソったれえー」

街中を逃げるスース男の背中を追う。俺とそいつとの距離がみると狭まっていく。その時の俺はまさに怒りの疾風となつて犯人を追うスプリンターと化していた。

そうなのだ。何を隠そう俺は中学の頃は帰宅部で、昼飯を食いつの
が早かつた。だから足はそれほど速くない。だが、そのスースー野郎
は俺よりもっと鈍足だったのだ。

「はあ、はあ……。さあ、返せよテメエ」

ついにそいつを路地裏に追い詰めた。なかなか手こぼらせやがつ
たスースー野郎だつたが、いよいよ観念したのか肩からバッグを下ろ
し手に取ると俺に向けて差し出した。

「はあ、くつそ。手こぼらせやがつて……」

俺がそのバッグに手を掛けた瞬間だ。そいつはあろうことかバッ
グを勢いよく振り上げ、思い切り俺の頭を殴りやがつた。

「ガツ！ 痛つて！」

ガクツと力を無くしその場に跪く俺。この脳天を突き刺す鈍い感
触。間違いない。さつき親の為に土産で買ったオリオンビールの瓶
だ。何でそんなもんバッグに入れとくんだ俺！

「くつそ！ お前え」

頭を抱えて苦しむ俺に、そいつはさらにバッグごと俺の身体めが
けて投げ捨て、再び街中へと走り去っていく。

「……チツ。痛つてー。何なんだよこの……オリオンビール！」

俺はフラフラになりながらもバッグを開く。取り出したオリオン

ビールにコンソメと説教を繰り返しつつ、肝心のその封筒を探した。

しかし、悪い予感は的中した。見事に封筒だけ無くなつてやがつた。もちろん、着替えのパンツだつてそのままだ。ま、そりやそつか。封筒とそれだけ無くなつてたらある意味氣味が悪いつて。

「ああ……、何なんだよもー。」

俺はガックリと肩を落とし、その場にへたり込んだのだった。

それから数分後、空港に戻つた俺。何よりも置きっぱなしのギターが気がかりだつた。

茶髪兔罪男がすでに居ない事を遠田で確認し、足早に空港のロビーに入る。果たしてそれは俺にとって本当にわずかな光明だつた。さつき座つていた椅子の前、『ご主人の帰りを待つかのように、『相棒』がじっと居座つているじゃないか。

「良かつた。コイツだけでも盗まれなくて……。って、いやいや、そんな悠長な事言つてらんねーか

シーズンオフにも関わらず、そこそこ観光客が行き交う空港ロビーや。その殆ど人が晴れやかな表情を浮かべる中、曇つた顔の俺はその椅子に再び腰を下ろすと、ため息を漏らすのだった。

「　アンタ……。ホントに大馬鹿だね

「何とでも言え。今は何の反論もできねえ

「やーいバー、バー

ム力ついたけど、やっぱり当たつていいだけに、何も言い返せない俺が居た。

国際通りのレストラン。とりあえず沖縄に来てまだ食べてなかつたソーキそばにがつつく俺。濃厚な味付けの角煮入りに舌鼓。その目の前で薫は散々嫌味を繰り返す。でも、その瞳は何だか妙に嬉しそうに感じた。

「何だよ。俺の見事なまでの不幸スパイラルがそんなに楽しいか

「別に……」

「……。何だその『カオリ様』的な返事

「別にい

「ムカつく

バッグを巡る壮絶なドタバタ劇の後、俺がロビーでじんより曇り空を展開している中、薫から電話があった。この沖縄で頼れる人間は薫しか居なかつた俺は、赤つ恥覚悟で状況を打ち明けると、仕事

の最中にも関わらず駆けつけてくれたんだった。

その後、警察で被害届を出し終えた俺たちは、昼食を兼ねてこのレストランに来ていた。

「今時国内旅行で置き引きに遭つ日本人なんてケタローベラいだよ

「はいはい、そうですね」

「昨日『オカンみたいに言つた』って偉そうに言つてたクセに

「そうですね」

「……今日はいい天氣だね」

「そうですね」

「なんと、明日は沖縄なのに大雪ひじいですよー。」

「……あーそうですか」

「おひ、多少は余裕あんじやん」

「うるせ」

すると薰は自分のバッグから財布を取り出した。真っ赤なちょつと「ゴツツイ恐らくブランド物の財布だ。この分厚さ……一体幾ら持つてんだ……。対して俺の財布はコンビニのレシートで嵩張つて分厚いつてーのに。嫌味な奴だぜ！」

「とつあえず、これは貸しだからね。じゃんと返せよ」

テーブルの上に数枚の諭古を差し出す薫。俺は咄嗟にそれを突き返す。

「ざかんな、要らねよ」

「そんな見栄張つて居^{ハシマ}いなにいしょ。とつあえず家に帰らなや。それとも沖縄で仕事探して暮らすつもり?」

「おー、それもいいかもな。頼りになるお前も頼むワケだし」

「……あれ? 『』でなかつたつけ?」

「何を?」

「私、別に『』で暮らしてゐるワケじゃなによ。今も私は東京在住ですよー」

わう言つと薫はストローをチューちュー鳴らし、トロロピカルドリンクを飲む。

「マジか。じゃあ何でお前『』んなアコヒ?」

「だから、仕事だつて『』でんじやん」

「……あの、イベント会社のか?」

「そだよ」

「やつなのか……」

「恐れ入った?」

「ははーつ、カオリ様……つてアホか」

店を出ると今田も嫌味なほどに快晴な沖縄の空。薫は「せつかくだし、海にでも行く?」と聞いてきた。当然、財布の中が風邪をひいている俺にとつて選択肢は限られていたわけで。それよりも、仕事中にも関わらず、そうやって俺を気遣う薫に感謝の気持ちでいっぱいだった。もちろん、そんな事口が裂けても言えねえけどさ。

那覇市内から數十分。国道を北にひた走り訪れたとあるビーチ。そういうえば薫と付き合っていた頃、二人で海に行つた事すら無かつたつけ。まあ、たつた三ヶ月の恋人関係だったから無理も無いか。

海をボケーっと眺めていると、さつきまでの高揚もようやく落ち着いてきた。すると自然と俺はそれを話していた。

「なんかさあ……。ここまで落ちたら妙にスッキリした。余計な事考えずに音楽やれそりだ」

「……じゃあ、やっぱ決心したんだ? 札幌行こ」

「ん……。いや、そのつもりだったけど、無職びじうか、金もゼロになつたんだぜ。身寄りの無い札幌なんて、俺には荷が重すぎるよ」

「ゼロって、本当にお金全部盗られたの?」

「ああ、ギーんぶ引を出したからなあ。」の二年間バイトで貯めた
金

「……つべづく、バカだねえ」

「あーそりだよ」

「じやあ。……理恵ちゃんも諦めるんだ?」

「諦めるつていうか。……うーん、何と言えばいいのか

「や」は違うんだ。……。ホント、バカだね

そうだよ。俺はバカだ。でも、だから余計にスッキリした。今の俺は好きな女とか以前に、それもひっくりめで純粹に音楽に打ち込めやうだつて氣づけたんだ。

「俺さ、さつきオカソに『家には当分帰らない』って言つたんだよな」

「ふーん。じゃあ本氣で家を出る気なんだ」

「まあ、な」

「へえ……。おひとつは眞直したかな」

「また上からかよ」

「やつじやなくて……。でもさ、札幌は諦めたんでしょ?」

「ああ、だけど俺にはもう一つ……。いや、本当は最初からそれしか無かつたのかもしないけど、まだ選択肢が残されてたんだ」

「もう一つ? あ、それってひょっとして」

流石に勘の鋭い薫だ。昨日俺が打ち明けた一連の年末年始の出来事からピンときたらしい。そうだ、俺に残されたもう一つの選択肢。それは……。

「行ってやるぜ! TOKYO!」

俺は立ち上がると思いつき天高く拳をかち上げた。うむ、久々にロッカーらしく決まつたぜ。

「ていーけー……おー? ノックアウト? あ、お笑い芸人の方?」

「……。『東京』だつづーの」

「だつたらちやんと初めから『東京』って言いなよ。面倒くさい

「め……。うるせーな。ここまでマジで惨めで酷かつたんだから、ちょっとくらいいカツコつけさせてくれても良いだろ」

「はいはい。じゃあ、その東京に行くお金はあるのかな?」

「オフツ。そこを突いてくるか

確かにコイツの言う通り。俺の財布にはその東京に向かつ飛行機代すら残つて無い。そりやその程度の金くらい、手軽に借りられるカードローンも何とか探せばありそただけど……。だが、ロッカー

が無人契約機を前に、タッチパネルにチマチマと金額打つて、いる姿
なんて想像したくもねえ。

すると、薰が「一ヤ一ヤ」と呟みを持たせてから俺に呟いた。

「じゃあお金くらいは貸してあげる。その代り、利息として私の寄
り道に付き合つてくれる?」

「寄り道?」

「嫌なら沖縄^[]で独り頑張つて生きてください」

「いやつ、無理つす! 寄り道でも寄せ鍋でもついて行きます。力
オリ様」

「よひしい。じゃあ早速今晚、ライヴに出演してもうつかうそのつ
もりで」

「はあ? 出演? 今晚?」

音楽を取り戻した俺に、沖縄のそれは急激な追い風となつて吹き
始めたのだった。

その日の夕方、俺は昨夜と同じライブハウスの樂屋でギターのチーリングをしていた。Hライ事になつちました。薫に言われるがままここに来たけど、まさかいきなりステージに立つ事になるとほな。

「あ、デルさん！」んばんは

「……よおつ

やつてきたのは昨日俺が散々ボロクソに言つたバンド、『黒南風』のリーダーシマケンとそのメンバー達だ。そうだ。俺は今晚、黒南風のステージに立つ事を薫から命じられたんだ。

「今日はよろしくお願ひします

「いや。つてか、俺もまさかこんな話になるなんて思つてなかつたんだ

「えつ？ そうなんですか？」

「何だ？ シマケンも知らなかつたのかよ

「はい。さつき和泉さんから聞かされた時はメンバー全員ビックリしましたよ

……薫の奴、何企んでやがる。今日のステージは対バンライブなんかじやねえ。『黒南風』の単独ライブなんだぞ。そこに全くの部

外者の俺をねじ込むなんて。

「あのやー、迷惑だろ？ 俺、薫に言つてやつぱ出るのは辞めるよ」

「いやいや、迷惑なんて。僕たちも最初は驚いたけど、今は凄く楽しみなんですよ。何か、今までと違ったステージになりそつで。なあ？」

「やうやう。デルさん、辞めるなんて言わよひみへお願いします」

黒南風のメンバーが揃いもそろつて嫌な顔一つせず歓迎ムードだ。何というポジティブシンキング。コイツら本当に音楽を楽しんでやがる。

「……シマケン、それに皆。黒南風つてめっちゃナイスガイな奴の集まりだな」

「ナイスガイ……ですか」

苦笑い浮かべるシマケン。それは謙遜ではなく、ビハヤヒ俺の言葉のチョイスが古かつたようだ。

「ほよつ、全員集合してるねー」

「和泉さん、お疲れ様です」

「お疲れーつ。……おやつ、そこで偉そつてふんぞつ返つてこるのは、ゲストのテルさんじゃないですか」

「……何い

「おー怖いゲストさんだ……。わあ、シマケン。やんわりハ始めるよ」

「あ、はー」

するとメンバーは手際よく仕度を始める。一度は出演を決めた手前、俺はとりあえず相棒のチューイングを続けるのだった。すると薰はとんでもない事を言に出した。

「デルの出演はアンホールの一発目だから安心して」

「……はあ？ アンホールだよ？」

「もううん、彼らは『承認みだから安心して』

「バカ！ 何で部外者の俺が『黒南風』の再登場を心待ちしている密の前に、ノロノロ現れなきやなんねーんだよ」

「だからこのゲストであり、サプライズじやん」

「お前、根本的に間違つてんつーの。サプライズつーのは……」

と、反論する俺の話なんか耳も傾げずに踵を返し、薰は黒南風のメンバーに手を叩きながら『令をだす』

「はーい、じゃあ黒南風の話さん、リハーサルよろしくお願ひしまーす」

「よろしくお願ひします」

メンバーはゾロゾロと楽屋を後にする。その後について行こうとする薰を俺は引き留めた。

「お前、本当に良いのかよ。ここまでお前に付いてきて大体察しはついてるんだ。どうせこのライブはお前の会社が噛んでるんだろ？大事なイベントに関係ない俺を出してお前の立場マジで大丈夫なのかよ」

すると薰はこの沖縄で再会して以来、見せた事のない真剣な顔で俺に言った。

「……私はケタローを信じてるよ」

ふと、その言葉が懐かしくもあった。何時だつたっけ……。このセリフ、前にも聞いたことがある。すると薰は一ヶコリと笑つて俺の胸に拳を押し付けると楽屋を出て行つた。

黒南風のライブが始まつた。

楽屋の階上にあるPA室からは、ステージと客席が窓越しに伺えることが出来た。音響さんの邪魔にならないように配慮しながら、俺はそのライブの様子を見下ろしていく。

前夜と同様に、いや、むしろ週末の今日は客の数も増えている気がした。その殆どがやっぱり女子中高生だ。一曲目から総立ちで場内のボルテージはガンガン増していく。

「うわあー……。マジで緊張してきたぞ！」

これでも人前に立つのは慣れているはずだった。『ローリング・クレイドル』のリードギターとして、場数もそれなりに踏んできた。だが、今日は違う。一人のギタリスト『デル』としてこの客の前に立つ。それも今までと全く異なる客層の前に。

「……それにしても上手いな」

正直言つと昨夜はステージの黒南風やシマケンの動きは殆ど見てなかつた。確かに彼らの音楽は俺の目指す音楽のベクトルとは違う方向を向いている。だが、田の前の客を自分たちのペースに惹き込む術を確実にモノにしている。

ふと、昨夜の嫉妬心が湧き上がってきた。もし、このステージに俺が立つたならもつと……。俺の中で「このままじゃ終われない」と後押しする。

「面白い。……やつてやううじやねーか」

俺は急いで楽屋に戻るとピックケースを取り出した。こここの中には大事なライヴでしか使わない七つのピックが収められている。今日のこのステージと、今の俺のメンタルにおあつらえ向きなそいつ。コードネームC、情熱の真っ赤なペーピックを握ると俺は瞼を閉じた。

イメージ出来るが。この後のステージの展開が……。楽屋に寄せては響く観客の熱気と共に。

「ケタロー、準備良い?」

ライブも佳境を迎えた頃、薫が楽屋を訪れた事に、俺はその時すぐには反応出来なかつた。それ程にイメージトレーニングに集中していたんだ。

程なくしてステージから引き揚げてきた黒南風の面々が楽屋に戻ってきた。ここまで全力疾走した彼ら。やっぱり皆一様に満ち足りて生き生きした顔してやがる。

そうなんだ。初めてステージに立つテンションではダメなんだ。彼らの作り上げた一時間余りの世界。そのテンションまで俺のメンタルを引き上げて臨まなければ、絶対に彼ら黒南風だけでなく、目の前の客に食われちまう。そんなワケにいかねえ。

「俺が、食つてやる！」

「……？ 何を食べるの？ お腹すいたの？」

まつたく、いつもいつも俺がカツコよく決めようとすると邪魔をするのは薫だ。

「何でもねえよ」

「そつ。じゃあ『デルさん、もうすぐ時間ですよ』

「……ん、おう。……チツ、近くに人が居る時は『デル名義かよ。 ややこしい奴』

するとアンコールブレイクを終え、充電完了したシマケンが俺の所にやって来た。

「デルさん、俺らに遠慮なくお願ひします！」

「遠慮なんかしねえぞ！ こつちこじや、よろしくなー！」

俺とシマケンはガツツリと握手した。そして黒南風が先にアンコールの声轟くステージへと歩を進める。俺もその後方から追随する。すると不意に薰が俺の肩を叩いた。

「ファイツ。ケタロー！」

俺は無言でそのホールに応えると、楽屋のドアを引き開けた。その瞬間、ライブハウスの熱気が俺の身体を包み込んだ。

アンコールを受けて黒南風の再登場に、フロアに「」と返す観客の盛り上がりも最高潮だ。でも、飲まれるわけにはいかねえ。逆に……食べてやる。

「 ありがとうー、ちょっと聞いて欲しい。今日は皆に紹介したい人が遊びに来てくれているんだ。知る人ぞ知る、孤高のギタリスト。デル！」

……つったく、誰も知らねエつて。なんつー紹介しやがんだ。と、ブツブツこぼしながら、俺はシマケンのアピールを受けて舞台袖からそのステージに赴いた。

「……誰？」

そのステージに立つた瞬間、俺の両耳に届く女子達の声。何だかんだ言つても狭いライヴハウス。本人は自覚しないだらうけど、無責任なそんな咳きも簡単に聞こえるもんなんだぜ。

それに、ステージに立てば、大体その場の客の雰囲気なんてコンマ数秒で掴める。皆、顔は笑つてるが内心「何だコイツ?」って言つてるのがビシビシ伝わつて来るぜ。且は口ほどにモノを言つとはよく言つたもんだ。

本当はここでシマケンと少しふり返す段取りだったが、俺は客の雰囲気を受けて咄嗟にシマケンに耳打ちする。

「ダレる。確実にダレるから、もう一気にぶつ放そうぜ」

すると、シマケンも俺の考えが伝わったらしい。「OK」と合図して黒南風のメンバーにアイコンタクトを取る。俺はピックを持つ右腕を振り上げ、瞼を閉じ心でカウントを取る。瞼の裏がやけに明るい。スポットライトが俺に照らされた。俺は勢いよく相棒を搔き鳴らした。

『20th Century Boy』

それはロッカーならお馴染、T・rexの名曲だ。そんなに音合わせもしていない即席バンドでも、この手の有名な楽曲なら結構即興でコラボできるもんだ。俺のギターを皮切りに、黒南風の演奏がそれこそ風のように乗ってくる。

ぶっちゃけ、まさかこの黒南風がこんな曲を演奏できるとは思ってなかつた。リハーサルで選曲の打ち合わせした時に、俺がちょっと口に出したこの曲に賛同したのが黒南風だつた。

この曲は彼らの音楽とは全く異なる性質だった。それが証拠に目の前の女子中高生は手拍子こそしているが、慣れないブリティッシュ・グラムロックに戸惑いを隠せない感じだ。

「さあ、お嬢さんたち。パーティの始まりだぜ

心でそう叫ぶと俺のギターがうねりをあげる。久々の表舞台に何とも嬉しそうな相棒。次第に俺の鼓動も熱くなつてくる。客層なんて関係ない。俺を表現するから付いてきたい奴はついてこい！

演奏を始めて間もなく、俺が驚いたのはシマケンのパフォーマンスだつた。この曲に対して見事にフリースタイルを仕掛けてきやが

つた。どんな楽曲であろうと自分たちの良さはちゃんと外さない。観客の求めるモノをしっかりと掴んでる。『イイジら、やつぱあの薰が田を付けているだけある。

サビに入ると徐々に観客が乗つてくる感覚が俺の身体に漂い始めた。イケルぞ。この感覚はステージに立つて初めて得られる心地よさだ。何だかんだ言つても、音楽に世代何て関係ないんだよな。

「 21th Century Boy …」

しつかりと歌詞をえてきやがつた。シマケン、何とも憎たらしいアドリブだぜ。まあ、きっと舞台袖の薰は「どこかの不動産屋かっ」とツッコミ入れているだろつ。でもな、ライヴなんてこういう勢いが大切なんだよつ！ そうだ、きっと黒南風のこういう柔軟な姿勢も、ここに居るファンに支持されている要因なんだろうな。

俺のギターとシマケンのマイクパフォーマンスが交錯する。激しいバトルがステージで繰り広げられると、初めは戸惑っていた目の前の女子中高生達が身体を揺らし、拳を突き上げはじめていた。そこは音のスクランブル交差点。拳を振り上げ交わるハーモニー。そうして一気にライヴハウスは一体となり、俺と黒南風のわずかな共演は大歓声と共に幕を閉じた。

「デル、ありがとう！ 皆、今日のゲスト、デルさんにもう一度大きな拍手を！」

その瞬間、フロアから湧き上がる拍手のうねりに俺は身震いした。わずか数分前、俺に対して白い目を送つていた客が、今この俺だけに対して拍手を送つてくれている。俺の胸に熱い得体のしれない物がこみあげてきた。それは、『ローリング・クレイドル』としてフ

アーストライヴを演りきった後に体感したそれと同じもの。

俺は一度、二度客に向かつて手を振り舞台袖に消える。やうして俺自身の復活ライヴは幕を閉じた。

結局、一度もステージで声を出さなかつた。実際、それは俺自身への挑戦だつたんだ。本当にギターだけで勝負できるのかつて問い合わせへの。……そして俺は勝つた。それどころか大きな武器を手にした。自信という大きな武器を。

「ケタローお疲れさま」

楽屋に舞い戻ると何だか妙に笑顔を振りまいてくる薰。ムズ痒い変な感じだが、もちろん、そこはロッカーとして平然を装う。

「おひつ。お疲れっ」

「あれ？ ひよつとして、自信ついたやつた？」

「はあ？」

「甘こよ。今日は『黒南風』におんぶに抱つこだつただけだもんね」

「……お前ねえ」

「イツ、俺を持ち上げたいのか、叩き落としたいのかどっちなんだよ……。その時はまだそんな風にしか思えなかつた。きっとそれは薰なりのコントロール。これから起こるハードルを俺が越えられるための。」

とあるカラオケボックス

「では、今日一日お疲れ様でしたーっ！」乾杯っ！」

「かんぱーい！」

ライブを終えた俺は、黒南風のメンバー や 薫、それにスタッフ数名と打ち上げに参加していた。なみなみと注がれたビールを一気に飲み干す 薫。コイツ、男性かつつーの。すると別のグラスビールに手を掛ける。

「シマケンも飲む？」

「いやつ、ダメつす。僕は」

「おいおい、未成年に酒を勧めるなよ」

「はあ？」デル君口ツカーのクセにマジメだねえ！」

お前、そんなに酒癖悪かつたっけ

すると薫は平氣な顔でそのグラスビールも空にした。強い。何なんだこの強さは。きっとこういうタイプは飲みつぶれても口説けないタイプだ。

今日のステージの事や、これまでの黒南風の足跡を肴にして、いつもより余計にビールもすすむ。そんな折、ふと会話の合間に流れ

てこるBGMが向となく気になつた。

「……あれ？」

「どうしたの？」

「いや、やはり今流れてる曲」

「有線だよね

「なーんかどうかで聴いたよ!な……」

「……ああ、これ最近よく有線で流れてるよ。『恋を奏でよう』って曲。聴ってるの?」

と、薫がそれを答えようとした時だった。シマケンがボソッと俺たちに話しかけてきた。

「ところで、和泉さんとデルさんってどうして知り合つたんですか?」

シマケンの何気ない質問は俺のエマージェンシーポイントをど真ん中に貫ぐ、最もシンプルかつ向意的ではない素朴な質問だつた。

「あーっ、それ俺も気になるー。」

「教えて下さるよ」

黒南風やスタッフがここぞとばかりに好奇の眼で俺たち一人に迫

る。全く、どいつもこいつもこう話が好きなんだな。絶対に付き合っていた事なんて言つもんか！

「えつと、彼と付き合つてましたー」

俺のエマージョン・シーサイレンが、ファンファンと赤いランプを回転させたかと思いきや、それを即座にぶつ壊した薰。コイツ、ハラハラドキドキめっちゃワクワク！ 的な行間を読むつて楽しみ方を知らないのか！

が、俺の事なんてそっちのけで、指笛鳴らすメンバーラの冷やかしこおどける薰。この明るさは酒の勢いか……。いや、コイツって元々こうなんだよな……。

あれ？ 俺、コイツの性格をこの誰より良く知つてている事で、どこか優越感を感じている……。なんだこれ。

「……『た』つてことは過去形ですよね？ でも、今もお一人めちゃくちや仲良い感じじゃないですか」

「やう？ それはシマケンの想い過ごじじゃないかな。全然仲なんて良くないよねえ？」

俺に振るなつづーの。あんまりこうこう話題で注目されるのは苦手なんだが、その実、「もっと冷やかしてくれ」と、俺の心で悪魔が舞い踊つていたことも嘘ではない。

「やうだな、まあ喧嘩ばっかだった……かな」

「やうなんですか？ でも、何だか今も付き合つてゐる雰囲気出でま

すよ

「もおー！〔冗談やめてよー」

……俺が言おうとした台詞を薫に横取りされちまつた。何もそんな食い気味に言ひ事ねえじゃねーか。

「でも、なんか良いですねそういう関係。別れてもお互い自然で居られるつて」

「つていうか、彼と私はもともと始まつてもいなかつたのかもね。昔もここれからせ」

その言葉に俺の内臓のどこかで激痛が走つた。それには本当に驚いた。俺の中で今は理恵ちゃんだけを想つていたはず。なのに、コイツと再会してから妙な胸騒ぎを感じていたことは否めなかつたんだ。そして、その胸騒ぎの正体がこの時ハツキリした。尤も、それはたつた今ぶつ壊されたが……。

「うーん……。そうね、今は良きパートナーつて感じかな？ ねえ、債務者君

「ゴホッ……、債務つてお前

「……？ 債務者つてどつていう事ですか？」

シマケンもうやめてくれ。今は俺の中でとつあえず色々と心の整理がしたいんだ。薫のノリにイチイチ付き合つていたら日が暮れるぞ。あ、もう午後十時か。

宴もたけなわとなり、演者やスタッフがお互いを労った後、俺たちばゾロゾロと店を出た。シマケンや黒南風のメンバーが俺に歩み寄つてくる。

「テルさん、今日は本当に有難いございました」

「いや、いやいや、良こそステージ見せて貰つて。おかげで楽しかったよ

「きっとドルさんなり予選突破すると思いますよ。僕らも頑張つて夏の本戦に出れるよう闘いていきます」

「あ、それ。昨日も思つたんだけども……」

と、その疑問を晴らさうとした時だ。向かいのスナックから騒々しい物音が聞こえてきた。

「何？ 何事？」

不安げにそのスナックに視線を送る薰。すると店内からサラリーマンらしい酔っ払いがフラフラと出て来ると、道端の電飾看板もろとも勢いよく倒れ込んだ。

「……ただの酔っ払いね。あーいう酒に飲まれるタイプにはなりたくないねー」

「いやいや、和泉さんはお酒強いですか。なりなこでしょ。むしろ酒を飲むタイプ」

「どうこう意味よシマケン

笑いとばす一人を横に、俺はふとそのサラリーマンに目を送る。起き上がったソイツは、まさに千鳥足で駅の方へと歩きはじめる。そのスースの後ろ姿を凝視した瞬間、俺の脳裏に昼間の出来事がフイードバックする。

「あ……！ あーっ、アイツは…」

そう、それはまさに俺の全財産を奪つて行った真犯人だった。俺は一目散にその男を追う。フラつき今にも倒れそうな男の腕を背後から鷲掴みにすると、今一度その男の顔を確認する。間違いない、昼間のあのスース男だ。

「テメエ、俺の金どうした…」

ツーンと鼻につくほどに酒の臭いがブンブン漂うその男。最初はワケのわからない事をブツブツと言つていたが、俺の顔をマジマジと見るや否や、どうやら酔いが一気に醒めたみたいだ。

「ひつ……。すこません！ 返せよ俺の金…」

「すこませんじゃねえよ… 返せよ俺の金…」

「ひいひ、すこません！ もう全部使つちやつたんですよ！ すこません！ すこません！」

「はあ！ ゼ、全部？ てめ、嘘つくな！」

すると血相を変えて駆け寄つてくる薰や黒南風のメンバー。

「どうしたんですか『テルさん』！」

「誰？ 知り合いなの？」

「……『コイツ』だよ。俺の金を奪った奴は」

「えつ！ 本当？」

いきなり大人数に囲まれたそのスース男は、怯えきつた表情で何度も俺に謝ると、今度は土下座して頭を下げ続けた。

「許して下さい！ すいません！ すいません！」

「ああ？ 謝つて済むワケねーだろ」

若さゆえか、血氣盛んな黒南風のメンバーが口々にそのスース男をなじり始めた。ちょっと待ってくれ、気持ちは有難いがそれは俺の役目だ！ すると、その騒ぎを見物する野次馬が周りを囲み始めた。

「……ダメだよ、みんな！」

黒南風を一気に制したのは薫だった。薫はメンバーの興奮をやんわりと抑えると、他のスタッフと共にスグに帰宅するように指示した。その対応は見事なまでに冷静かつ的確。『コイツ、さつきまで散タビールを飲んでいた女とマジで同一人物かよ。』

「許して下さい！ すいません！ すいません！」

何度も何度も頭を下げる謝り続ける男。惨めだ。マジで惨め過ぎ

る。恐らく二十代後半くらいか。こんなオッサンにはなりたくないもんだ。そんな風に思えてくると、何だかさっきまでの怒りが鎮まつていた。

ふと、足を止める野次馬が増えてきた事が気になった俺は、大声でそれを訴えた。

「すいません、お騒がせして。この人俺の知り合いですんで！ 大丈夫です。喧嘩とかじゃないんで！」

すると、表向きは真剣な顔してるクセに、内心ニヤニヤ顔で立ち止まつた人々が、半ば興味を失つた表情浮かべ散つていぐ。全く、こういう野次馬どもが一番鬱陶しいぜ。

「もう、いいよ薰」

「……ケタロー？」

「よくよく考えれば、コイツのおかげで、俺は薰とまた会えて、それにライヴにも出れたワケだし」

「……そりゃそうだけど」

「俺、金よりも大事なモンを手に入れた。だから、もういいや」

俺の「もういいや」を受けて、スーツ男は徐に立ち上がる。そして俯いたまま俺の両手を握り、再び何度も謝り続けた。

「すいません！ すいません！」

「だから、もういいって。……ってかさあ、謝るならひやんと俺の目を見て言えよ」

俺はスース男の腕を持ち上げその表情を伺つた。……なんだ、やつぱりそうか。口では謝つてはいるが、思いつきりその目は「良かつた、見逃がして貰えそうだ」つて笑つてゐるぜ。これでもステージで嫌というほど色んな人間の目を見てきたんだ。わかるんだよ。

「チツ……。行こうぜ薰」

俺はスース男の腕を突き放し、そのまま立ち去ろうとした。だが、薰はそのスース男の前に立ちはだかる。

「薰？」

すると薰はニッコリとそいつに笑顔を見せた。するとそのスース男は「すいません、すいません」と言いながら、羞恥心のかけらもなく「テレテレ」とした顔つきで薰の手を握りつとした。

「……触んなバカ！」

薰の黄金の右腕がうなりを上げてそのスース男の頬に振りぬかれた。乾いたパーンという音が街のネオンに共鳴する。やがて、今度は左でもう一発。

「あー……。アイツやつちやつた」

薰の強烈な平手を受けて、再びフラフラとその場に倒れ込む男。すると薰は携帯電話を取り出す。

「もしもし、窃盗犯を捕まえたんですか？ 場所は……」

いやはや。この女は敵に回したくないもんだ。ま、ともかく色々とあつた沖縄だつたけど、薫との寄り道はそこそこ有意義だつた。あつと明日には「」を發つて、いよいよ俺の新生活の舞台、東京に向かうぜ……。

ヒ、俺は勝手に思い込んでいたのだった。

「どうこいつもりだよ」

「何が?」

「こんな寄り道聞いてないぞ」

「いいでしょ。私がお金出してんだから。それとも、どこかアテがあるのかな?」

「……はあ」

沖縄で音楽を取り戻した俺。てっきりそのまま東京に向かうと思っていた。一日も早く店長に会って、東京での生活の基盤を作りたかった。だが、金を失った俺の行動は、今までに座席の横で雑誌を読み耽っている薫に委ねられていたんだ。

そうそう、その俺の財産を奪つていったスース男。あのわずか数時間で全部使つたってのはやつぱりマジだつたらしい。その殆どがギャンブルと風俗つていうから胸糞悪い。

ただ、俺にとっちゃ金より音楽への初心を取り戻したことが大きかったのも事実。俺の被害届は取り下がたが、そいつはどうやら色々と余罪もあるようだ……。ま、もう俺にとっちゃどうでもいい話だ。

もつとも、警察沙汰の何もかもは、薫が会社を使って色々と手を回してくれた。おかげでこうして今も家に強制帰宅させられる」と

も無く旅を続いている。……つてなワケで、薫の寄り道にとことん付き合うしかねえって状況だ。何だ？　俺、誰に向かつて説明してんだ？

「あつ、見て見て！ 街並み見えてきたね」

「……ああ。そういうや俺、大阪つて初めてなんだよな」

「ふーん、そうなんだ。ワクワク。大阪楽しみだねえ」

「……俺はそうでもねえぞ」

「まあまあ。せつかくなんだし楽しもひ、楽しもひ。 そりだ、吉本
新喜劇観に行ひよー。」

「……勝手にしろ」

沖縄から大阪へと駒を進めた俺の人生ゲーム。だが、何だかんだ言つても、薫の掌のサイコロに右往左往されるこのゲームも、ちょっと悪くないかもしないなと思い始めていたことも、まんざら嘘じゃなかつたわけで。

空港から数時間、大阪市内のとあるホテルでチェックインを済ませると、そのままホテルのレストランに赴いた。もちろん、部屋は別々だ。少しばかり「ひょっとして同室?」と期待した俺が馬鹿だった。ま、これも悲しい男のサガだと自問自答。

「何ブツブツ言つてんだ？」

「うがつ。いやつ何でも……」「

「あやしこ……」

「平仮名で書つた。漢字より妙に感じへなるじやねーか。……つてか、それより俺はもう逃げようが無いんだし、ちやんと話してくれよ」

「……？ 何を？」

「お前の企み」

「企みって、人聞き悪いこと書わないでよな。……あ、すいません」

「わかった。お前の今やううとしてるビジネスを、ちやんと全部教えてくれ」

するとウーハイトレスがやつて来た。薰はハンバーグパリフと若鶏のから揚げとフレッシュサラダとアイスクリームとオレンジジュースを注文……つて、どんだけガッシリ食つんだよ……

「え？ と、何の話だつけ？」

「よく太らねえな……じゃなくて、とつあえずシマケンが言つてた『夏の本戦』つて何の事だよ」

「ああ、『でた』『せこ』つて……あつ」

「『でた』『せこ』つて……あつ」

さうだ、思い出した。店長のスタジオに張り出していたポスター。今年の夏に開催される野外音楽フェスティバル。その名も『でてこいや音楽祭』。シマケンはその事を言っていたのだ。すると薫はそのイベントについて説明を始めた。

「今年が初めての試みとなる、新人ミユージシャンの為のオーディション型野外音楽フェスの一つ。応募資格は大手のプロダクションやレコード会社に所属していない、アマチュアやインディーズのミュージシャンなら誰でもOK。新しい才能を発掘して、一気に開花させることがこのイベントの壮大な主旨。その主催者が、何を隠そう私の会社『NOW』。で、私は各地の有望な新人を調査しているの」

「はあ……。なるほどな。ってことはあの『黒南風』も、そのイベント出場の有力候補ってワケだ」

「やつこつ」と。私に割り当てられた担当地域が、沖縄と関西。それと四国」

「ふーん……。っておい、まさかこの後、四国にも寄り道する感じや……」

すると薫は一ヶ口リと微笑み返し。もうそれ以上の言葉はねえ。ともかく、よつやくシマケンの言つていた事は理解できた。ただ、あの時彼はこの俺をまるで出場志望者のような口ぶりで話していたわけで。ってことは……。

「せうか。お前、俺もそのイベントに出場せよつて魂胆だな」「だから……人聞き悪いなあ。さつきからまるで私がケタローを操

り人形にしてるよつて言つてるけどさあ「

つてか、実際にそつじやねーか。……だが待てよ、薫のその話に乗つかるのも悪くは無い。今の俺にとつて音楽の道に目標が出来るのは、モチベーションを高める上でも願つたり叶つたりだからだ。

「よつし、その話乗つた。そうとなりや夏に向けて練習ガンガンやつてやろうじやん！」

ガツシボーズ決める俺。すると呆れ顔で薫は溜息をつき、テープルに用意された籠からフォークを手に取ると、俺に向けてそいつで指さしをする。

「……あのさ、ハツキリ言つとくけど、アンタが出演できるかどうかなんて知らないからね！」

「へつ？ またまたあ、『謙遜を。『黒南風』のライブに俺をねじ込めるほどの力を持つているクセにい」

「バカ言わないの。あれはあくまでも地方の小さなライブイベントの一つ。『でてこいや音楽祭』はウチが社運を賭けた第一回田のビッグプロジェクトなの。アンタみたいなド素人を簡単に出場させるわけないっしょ…」

「ド素人で……。そりや そろがもしれねえけどさ。つか、お前がさつき『新人なら誰でも参加OK』って言つたんじやねーか

「はあ……。あくまで『応募資格はある』って事だよ。それはそつと……ハンバーグピラフまだかなあ？」

全く「コイツ、食えねえ女だ。ていうか、俺ひょっとして「コイツに食われっぱなしなのか？ 何だ、じゃあ俺は西遊記の孫悟空かつーの。と、脳裏でツツ「コミを入れていると、ウェイトレスが『そつな匂いを引き連れて料理を持って来た。

「わあ……ほら見て、結構美味しそうじゃん！ 一いつただつきまーす」

お待ちかねのハンバーグパラフにパクつく薫。コイツの原動力はこの食欲にあるようだ。

「……あー、ちなみに『でこいや音楽祭』で優勝したら、ウチの親会社とアーティスト契約できるんだよ」

「契約？」

「そりゃ、ウチの親会社ってプロダクションの『バズソージャパン』なの。傘下にはレコード会社もあるからね。つまり、そこと契約つて事は一気にメジャーデビューの道が拓けるってワケ

「へえ……。スゲェな」

「しかも、副賞は日本武道館での単独ライブ！」

「……！ マジか？」

「ね、夢のある話でしょ？」

「ついこの間まで素人だった奴が、いきなり武道館つて。いくらなんでも信じられね！」

「あつや。なら別にいいけど、そんなの嘘ついてもしょうがないじゃん」

「ん……まあ、せつか」

とは言つたものの、せっぱりにわかに信じがたいあり得ない話だ。ただ、本気で音楽をやつしていくと出航した俺の船にとって、それは願つても無い灯台の光だった。しかもその港は、俺にギターを「えりきつかけとなつた武道館のステージ……。

見えてきたぞ。そこを田指せば良いんだな。燃えてきたぜ。やつてやろうじやねーか。とはいえ、まだその船は港を出たばかりだ、これから航海の為に、ともかく俺もメシを……。

「あーっ！ 僕なんも注文してねーじやん！」

「あれ？ そりだつたけ？」

「そうだつたけって、お前が大量に注文するからウロイトレスも一人分だと勘違いしたんじやねーか！」

「ブツブツ言つてないで、そこのブザー押して店員呼べば？」

……コイツ、やっぱり食えない女だ。俺は早速呼び鈴を押し、ハンバーグピラフを注文するのだった。ロッカーが女と同じ物を注文するのは癪に障るが……。皿をうなんだから仕方ない。

「よひ、和泉じやないか」

「……！ リ、リッキーさん。おまわりになりますー。」

慌ててピラフのスプーンを置くと、薫は勢いよく椅子から立ち上がり頭を下げる。その相手は見るからにビール腹で少々大柄な、おそらく四十年代後半の男。むせ苦しい顔つきの上にボサボサの長髪が余計に鬱陶しい。

「どうされたんですか？ 今田は確か山口に行かれたはずですよね？」

「ああ、ちょっと例のアレでな。……彼は？」

「はい、あの、彼が先日お話したテル君ですー。」

先日話した？ 僕の何をだよ……。すると薫が少し睨みを利かせ、俺に「立て」と言わんばかりにジェスチャーを繰り返す。面倒くさいが仕方なく俺も立ち上がった。

「……どうも」

「フツ、そうか、アレか、君が。君がアレなんだな？」

何だこのオッサン。「アレ、アレ」って意味がわからねーよ。すると、いつもと違つて妙にしおらしくなつた薫が俺に話しかけてきた。

「紹介します、この人は『NOW』の企画部長で私の上司、リッキー

一吉田です」

「吉田です。よろしく」

「あ、そりなんすか……。えと、『テルです。よ、よろしく』

すると、一やりと笑みを浮かべ握手を求めてきたそのオッサン。何だか気味が悪いが一応愛想笑いでそれに応える俺。だが、この不敵な笑みをこの先何度も見なくちゃならなくなるなんて、この時はまだ想像もできなかつたワケで。

昼食後、薰は仕事で神戸のイベント会場に向かった。沖縄同様に関西でもイベントのマネジメントと、新人ミュージシャンの調査があるらしい。俺はフロントで薰と一旦別れると、そのままホテルの部屋に向かった。

部屋に入ると早速ギターケースを手に取り相棒を担いだ。薰から聞かされた『でてこいや音楽祭』。つい一ヶ月前なら、それは『俺たち』の目標だった。でも、今はこの『俺だけ』の目標となつた。それが明確になつた今、じつとじしているワケにはいかなかつた。

スタジオでバイトしていた時も、あのポスターを見て「俺たちも応募しようかな」と薄々は思つていた。その矢先に解散しちまつた。思えばあの時、理恵ちゃんには偉そうな事言つたけど、俺自身は一人になつても応募しようなんて考えもしなかつたんだよな。その時点で俺は逃げていたんだ。

でも、今は違う。自分でも不思議な程に活気が漲つてゐる。そして、この感覚が音楽と向き合つて事もやつとハツキリ分かつた気がしてゐた。

いや、本当を言えればそれに気がつかされたのは、薰との再会があつてこそなんだよな。だからこそ、俺はもっと高みを目指さなきゃならない。『でてこいや音楽祭』だあ？ おあつらえむきだ。出て行って食つて食つてやるよー。

小一時間ばかりギターを奏でては、思いつくままに詞とメロディをかき混ぜる。バンドの頃もこつこつ作業はやつてきたけど、ビニ

かでケインや他のメンバーのセンスにも頼ってきた。でも、これらはそうはいかねえ。そう、沖縄からここに来るまでの道中、薰から嫌味っぽく言われたんだ……。

「ケタローってギター弾くだけなの?」

「……? どうこの意味」

「ほり、『黒南風』のライブで歌わなかつたよね?」

「それは……。とりあえず、ギターで勝負したかつたんだよ」

「ふーん。気持ちは分かるけどさあ、昔は『弾き語りやつての』って言つてたじやん? やつぱギター弾くだけじゃなくて、歌もつたつた方が良くなない?」

「うそ、まあ……やくわくば」

「やくわくつて……。一人なんでしょう? 今始めるないと何時始めるのよ」

「いや、実際問題、ここ数年はケインのボーカルを意識して作つてきたからね。自分が歌うつて事を前提にしてない曲ばつかなんだよ」

「だったら一度いいじやん! 今はケタローの想いをメロディにしで、詞を乗せて表現すれば、ギターだけじゃ限界あるし、絶対その方がいいよ!」

「……ん、だな。そうだよな」

俺にしか出来ない表現。それは必ずしもギターだけじゃないんだよな。例えば……。そう、サックスとかアコーディオンとか、まさかのテルミンとか。……いやいや、違う違う、そうじゃない。俺は基本ギタリストだつーの。ま、そういう他の楽器に手を付ける事もこれからゆくゆく……。ってな事を考えていると携帯電話が鳴った。俺はその相手と『氣づく』と勢いよく通話ボタンを押す。

「もしもしー 店長お久しぶりですー。」

「もしもし? いや、久しぶりだね。先日から電話くれていたのに、なかなか時間が取れなくてすまなかつたね」

それは小川店長だつた。実は東京行きを決めた日。俺は沖縄から何度も店長に電話を掛けていたんだ。だが、なかなか繋がらなかつたワケで。仕方なく俺は要件だけ留守電に入れておいたんだ。

「あのー、早速なんですけど……。例の話なんですが」

「ああ、もちろん大歓迎だよ。君が来てくれば私の時間も取れるし本当に助かる。で、東京には何時ごろ来れそうだい?」

「あ、それがですね……。ちょっと色々とあります」

「そりだつたね。引っ越しの準備もあるだらつ」

「いえ、といつか実は……」

ちょっとと考えたが別に悪い事しているワケでも無いし、何よりピックのお礼も兼ねて俺は店長に打ち明けた。沖縄でひょんな事から

ライブに出演した事を。そうなんだ。あのライブで使つた情熱のピックは、この店長から貰つた去年の誕プレだったからだ。それは店長が『櫻神楽』時代から使つてきたメンバー オンリーのオリジナル。どこにも売つていらない貴重な物だつた。

「あのピック、しつかり使わせて貰いました」

「そりゃかい。今も大事に使つてくれていて嬉しいよ。……それにしてもよく出演できたね？」

「はあ、それがですね。実は知り合いと偶然会つて。そいつがイベント会社の『NOW』って所で働いていて……」

「え？『NOW』？」

「あ、はい……。」存知ですよね？」

「……ああ、そりゃもちろん」

そりゃ『櫻神楽』時代から、音楽畠で長年生きてきた店長が知らないワケが無い。『NOW』は今や音楽業界では日本で指折りのイベント会社だ。ただ、店長のその奥歯に物の詰まつたような返事が俺は気になつた。おいおい、ひょっとして知つたかぶりか？

「そんなワケでその知人の仕事に付き合わされているんです。でも、多分あと二、三日もすれば東京に行けると思いますから」

「……そりゃかい。分かつた。とにかく、またこつちに着いたら連絡をくれるかい」

俺は威勢よく「ハイ」と答えて電話を切った。良かつた、何とか東京での職も確保できただぜ。内心、店長から「もう人雇つたから要らね」って言われんじゃねーのかとドキドキだった。早めに電話だけは掛けておいて良かった。

「さあーて、そつと決まれば練習だ」

再び相棒を担いだ矢先だ。部屋のインター ホンが鳴った。

「……？ 誰だ」

俺は取り立て不審がる事も無くドアに向かう。薫が仕事を早く終えて帰つて来たのかと、その程度に感じていたからだ。ただ、ドアを開ける前に念のためドアスコープから廊下を窺つた。

「……！」

ドアをゆっくり開けるとその人は例のあの不敵な笑みを浮かべてきたじやないか。俺は軽く会釈した。

「こ、こんちは」

「やあ、デル君……だつたな。寬いでいる所悪い。ちょっと部屋いいか？」

「はあ、どうぞ……」

「」の俺に何の用があつてやつて来たのか。それは薫の上司、リックキー吉田さんだった。部屋の中に通すとリックキーさんはソファの横に立てかけたそれを見て問いかけてくる。

「おっ、なんだ。アレか？ 早速アレ弾いてたのか」

「はあ……。まあ」

「……？」のピック

それはテーブルに置いていた小川店長から貰ったピックだった。

「何で君がコイツを？」

「あ、実はバイト先の店長から貰ったんです」

「……店長？」

「ええ、東京に着いたらその人のスタジオでまたお世話になるんです」

「うん？ スタジオだって？ ……アレだ、名前は？」

「え？ はあ、小川さんですけど」

「小川……功治か？」

「はい、そうですけど？」

すると突然リックキーさんは驚いた顔をしてそのピックをマジマジと眺める。そしていつものように不敵な笑みを浮かべた。

「そりが！ アレか！ 小川なんだな？」

そう言ひといきなり高笑いをしながらリッキーさんはソファにびっかりと腰を下ろした。何が何だか分からぬまま俺も苦笑いを浮かべる。するとリッキーさんは俺にそれを告げたのだ。

「小川はな、オレの元バンドメンバーだよ」

「は？」

「知ってるか？『櫻神楽』は、そこでオレはボーカルをやつてたんだよ」

「ええ！マジっす……じゃなくて、本当ですかっ！」

俺の前に、もう一人の『櫻神楽』が現れた。それが、俺のこれから歩む道のりに、大きな影響を与えることになるとは、まだ想像も出来なかつた。

驚く俺を見てリックキーさんはまた不敵な笑みを浮かべながら、「ちょっと借りるぞ」とギターを担ぐ。軽く奏でたそれはいつか店長の弾いていたそれと同じだった。

「久しぶりだな。何だか懐かしいぞ」

「はあ、そうですか……」

しばらくするとそのギターを手放したリックキーさんは、俺に向かって睨みつけるようにそれを言った。

「どうだ、ウチの新しい会社に来ないか?」

「はあ……。はっ?」

「もちろん和泉のようなイベント業じゃないぞ。当然ミニヨージシャンとしてだ。新人の為の育成を兼ねたプロダクションを昨年から立ち上げたんだ」

果然とする俺にリックキーさんは追い打ちをかけるように様々な待遇を提示してきた。当面の住まいも、音楽に打ち込めるためのスタジオも機材も、わずかながら生活費も面倒を見るという。ハッキリ言つて夢のような話だった。

「どうだ? 悪い話ではないだろう?」

「はい。でも……」

願つても無い誘いだつた。それにプロダクションに入るつて事は、何のコネクションも持たない俺にとっちゃ、メジャー・デビューだつて頑張れば夢物語では無いはずだ。

でも、俺には店長への義理がある。つにさつき、この俺の上京を歓迎して待つてくれている店長が。俺にはとてもすぐに出せる答えじゃなかつた。

「まあいい。よく考えてみてくれ。良い返事期待してこるが

「あ……。はい、すいません」

ソファから立ち上がつたリックキーさんは、またあの笑みを浮かべ俺の肩を一度ほど叩くとそのまま部屋を出て行つたのだった。そのドアが閉じられた瞬間、俺は今年一番の大きなため息を漏らした。

「おいおい、どうすりやいいんだよ……」

つい数日前には女と東京で迷つっていた俺に、突如として似たような現実が押し寄せる。しかも今回ばかりはマジで俺自身の人生に関わる岐路に立つてしまつてゐる。

「あー、そういうや今朝の星占い観てなかつたぜー!」

人間、パニックに陥ると本当に口に出さなきやいけない事を心に仕舞い込み、どうでも良い事を大げさに口にするものだ。そう、それが俺の十八番大きな独り言。

早速携帯電話で占いをチェックしようと手に取ると、今度は薰か

ら電話がかかってきた。

「ケタロー、今どこに居る?」

「……ああ、どいつもホテルだよ。それよつさつきや……」

「話は後で! とにかくギター持つて来てほしいの!」

「はあ?」

「お願い! こんなのがケタローしか頼めないんだよお

いつもと違つて弱気な薰の声がその深刻度を物語つて心配になつた。俺は身支度をして部屋を出たのだった。

兵庫県の大型ショッピングモール

大阪に到着した時は晴れ間もみえていたのに、どんよりとした曇り空になつていた。俺の今の心のようなそんな空を恨めしそうに眺めながら、俺は駆け足でそのショッピングモールの入り口に向かうと、薰がそわそわした素振りをして辺りを見渡している。

「薰!」

「ああ! ケタロー! めんね

「何だよ。どうした? 何かあったのか?」

「とにかく来て!」

そう早口でまくしたてた薫は俺の腕を掴むと、思い切り引つ張りショッピングモールの中に連れ込もうとする。

「おい、別に逃げないからけやんと話せよ」

「とにかく、時間無いのー、話は控室に行つてから」

「お前、まさかまた……」

そんな俺の嫌な予感は大体、毎回、的中する。関係者以外立ち入り禁止の通路を薫に引っ張りまわされてやつて来たそこは、ショッピングモールの屋上にある一室だつた。一歩踏み込むとタバコのヤ一臭さが俺の鼻を刺激する。その部屋に入ると薫は元気よく挨拶をする。

「おはようござりますー。」

すると、中に居た黒ずくめの男達が「うーーす」と陰気な返事をする。年齢は恐らく三十代くらい。何だか感じの悪い奴らだ。

「あの、実は第一部で出ていたバンドの皆さんなんですが、こちらに来る事が出来なくなつました」

すると、テーブルに肩肘立てて雑誌に目を通していた男が、こっちを見よつともせず返事をする。

「あ、やっぱ。で、どうすんの?」

「あの、『トッシ』の皆さんの時間まで、何とか繋いでくれる方を

探してブッキングしましたので」

すると、その男がチラリと薫を一瞥すると少しニヤついた。どうやらそいつがこのバンドのリーダーらしい。やせ気味で鋭い目つきのそのキツネ目の男。くわえたバコで立ち上がるとフリフリと薫に近付いてきたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1665w/>

ロクンローライフ

2011年11月20日00時09分発行